大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No.62　　2013. 6. 1.

目次

情熱の薔薇　1
2013(平成25)年度「特定・指定研究」等研究組織一覧　2
2013(平成25)年度「特定・指定研究」等研究目的紹介　4
2013(平成25)年度「一般研究」研究組織一覧　8
2013(平成25)年度「一般研究」研究目的紹介　11
海外学会参加報告　24
海外研究調査報告　26
国内学会参加報告　28
国内研究調査報告　30
共同研究及び公開研究会報告　33
研究成果報告会　36
特別研究員研究成果報告　38
彙報　44

情熱の薔薇

「建学の精神」教育推進研究チーフ　教授　木越　康

草野顕之学長を研究代表者として、「建学の精神」教育推進を目的とした「大谷大学建学の精神具現化」研究班が立ち上がった。1990年代以降の規制緩和による大学の新設ラッシュや少子化の影響を受け、学術研究及び教育の最高機関である大学も市場原理によって淘汰される時代を迎えている。入学希望者総数が入学定員総数を下回るいわゆる全入時代にあって、「選ばれる大学」であることを目指して、各大学は自らの教育や研究のあり方を検証する第一歩として建学の理念の明確化とそれに基づく教育推進に取り組んでいる。特に私立大学は、元来それぞれが固有の理念をもって設立されたものであり、その精神に基づく個性豊かな教育研究の展開が大学として存在する生命線となる。本研究に託された願いも、そのような状況と無関係ではないであろう。

「大谷大学建学の精神」を最もよく表現するのが、初代学長清沢満之の「真宗大学開校の辞」と第三代学長佐々木月樵の「大谷大学樹立の精神」である。両訓辞を「建学の精神」と定める制度的規定はないが、前者は真宗大谷派なる宗門が「社会に捧げる大学」として東京に「大学」を開校した際に語られた言葉であり、後者は1918年に発令された大学令に基づく大学として京都への移転を遂げた大谷大学が、新しい学制のもとでいかに存立するのかを確認したものである。1665年に開創された東本願寺の学寮を前身とする本学は、日本の近代化や教育体制の整備と歩みを共にする形で大きな転換を遂げてきたが、節目にあって大学がどのような理念に基づいて社会に存立するのかを確認するという意味で、両訓示はまさに「建学の精神」を具現化するものと言えよう。その後大学をめぐる状況がさまざまに揺れ動く中でも、本学は常にこの二つの訓示に立ち返って方向性を確かめてきたのである。

その大谷大学の建学の精神をもっとも端的に語るのが、清沢満之の次の言葉である。「本学は他の大学と異なりまして宗教学校なること、殊に仏教の中において浄土真宗の学場であります」。日本の近代化を先頭に立って担うべき人間を育成するために多くの大学が設立される中にあって、「宗教学校」との言葉によってまずは独自性を明示した。すべての「他の大学」と異なって「宗教学校」であること、中でも殊に「仏教」精神に基づくものであり、「浄土真宗の学場」であると言われる。言葉の流れとして、次第に閉ざされた空間へと追い込まれる印象を持ってしまうが、清沢の意図はもちろんそうではない。

「開校の辞」が語られたのと同時期、清沢は東京の浅草で連続講義を行っている。その講義メモに「宗教」について次のように記されている。「パンのため、職責のため、人道のため、国家のため、富国強兵のために、功名栄華のために宗教あるにはあらざるなり。人心の至奥より出づる至盛の要求のために宗教あるなり」。「政治、法律、一切世間の制度は、皆宗教のためなり」。清沢にとって「宗教」とは、人が人として生きる中で、心の奥底から湧き上ってくる要求そのものであった。政治や法律、世間のあらゆる事象も、すべてはそのような心の至奥からやってくる要求を実現するための手段でしかない。教団組織としての「真宗」も、むろんその一つでしかない。

「人心の至奥より出づる至盛の要求」とは何であろうか。かつてThe Blue Heartsは、それを「心のずっと奥の方にある情熱の薔薇」と詩った。「見てきた物や聞いた事　今まで覚えた全部　でたらめだったら面白い　そんな気持ちわかるでしょう」。見てきた物、聞いた事、覚えた事のすべては「でたらめ」かも知れない。様々な世間的事象に翻弄されて生きながらも、そのことのすべてが「でたらめ」かも知れない、そんな気持ちを「わかるでしょう」と言う。なぜ「わかる」のか。彼らは歌う。「答えはきっと奥の方　心のずっと奥の方　涙はそこからやってくる　心のずっと奥の方」。でたらめか、そうではないか、答えは心のずっと奥の方にある。それは「涙」が証明する。意識を超えて溢れ出す悲しみの涙は、人間の行うあらゆる「でたらめ」を深く悲しんでいる。優しさに触れて湧き出る温かい涙は、人間のあるべき「本当」を知っている。答えは「心のずっと奥のほう」に、実ははじめからあるのである。

情熱の真っ赤な薔薇を胸に咲かせよう、心のずっと奥にある花瓶に水をあげようと歌い叫ぶ彼らの声に、青年たちを前に「至盛の要求」の開発を説き「誠を尽くす」ことを熱く語った清沢の姿を思い浮かべるのは、間違いであろうか。胸に情熱の真っ赤な薔薇を咲かせる大学、それが清沢が大学に託した願いなのかも知れない。

2013(平成25)年度「特定・指定研究」等研究組織一覧

【特定研究】

研究名	研究課題及び研究組織	
「建学の精神」教育推進研究	研究課題	大谷大学建学の精神の具現化
	研究代表者	草野顕之(学長・教授・日本仏教史学)
	研究員	木越　康(チーフ・教授・真宗学)
		望月謙二(教授・国語科教育学)
		渡辺啓真(教授・倫理学)
		福島栄寿(准教授・近代日本仏教史・近代日本思想史)
		箕浦暁雄(准教授・仏教学・人文情報学)
		冨岡量秀(准教授・真宗学・幼児教育学)
		西本祐攝(講師・真宗学)
	研究補助員(RA)	拝原祥子(博士後期課程第3学年)

【指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織	
国際仏教研究	研究課題	諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開
	研究代表者	井上尚実
	研究員	井上尚実(准教授・真宗学)
		新田智通(講師・仏教学)
		藤枝　真(准教授・宗教学・哲学)
		松浦典弘(准教授・東洋史学)
	嘱託研究員	Michael Pye(マールブルク大学名誉教授)
		Mark L. Blum(カリフォルニア大学バークレー校教授)
		Paul Watt(早稲田大学留学センター教授)
		阿満道尋(アラスカ州立大学アンカレッジ校准教授)
		羽田信生(毎田周一センター所長)
		Michael J. Conway(本学非常勤講師)
		松下俊英(本学非常勤講師・特別研究員)
	研究補助員(RA)	光川眞翔(博士後期課程第3学年)
	(RA)	林　研(博士後期課程第3学年)
	(RA)	尾﨑俊文(博士後期課程第3学年)
西蔵文献研究	研究課題	チベット語文献及びパーリ語貝葉写本のデータベース化
	研究代表者	福田洋一
	研究員	福田洋一(教授・仏教学)
		松川　節(教授・モンゴル学)
		三宅伸一郎(准教授・チベット学)
	嘱託研究員	武田和哉(本学准教授・人文情報学)
		白館戒雲(本学名誉教授)
		Gantuya.M(モンゴル国立大学社会科学部教授)
		清水洋平(本学・神戸国際大学非常勤講師・特別研究員)
		髙本康子(北海道大学スラブ研究センター学術研究員)
		西沢史仁(東京大学大学院人文社会系研究科研究員)
		石田尚敬(東京大学大学院人文社会系研究科特任研究員)
		伴　真一朗(博士後期課程修了)
	研究補助員(RA)	稲葉維摩(博士後期課程第3学年)
	(RA)	Kim Keonjoon(博士後期課程第3学年)

【資料室】

名　　称	研　究　課　題　及　び　研　究　組　織	
大谷大学史資料室	研　究　課　題	大学史関係資料の収集・整理
	室　　長	藤　田　義　孝（研究所主事・准教授・フランス文学）
	嘱託研究員	戸　次　顕　彰（本学非常勤講師）
	研究補助員（RA）	松　岡　智　美（博士後期課程第3学年）
東本願寺海外布教資料室	研　究　課　題	大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の整理
	室　　長	桂　華　淳　祥（教授・東洋史学）
	研究補助員（RA）	濱　野　亮　介（博士後期課程第3学年）
デジタル・アーカイブ資料室	研　究　課　題	大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築
	室　　長	藤　田　義　孝（研究所主事・准教授・フランス文学）

2013(平成25)年度「特定・指定研究」等研究目的紹介

「建学の精神」教育推進研究

大谷大学建学の精神の具現化

研究代表者・学長　草野 顕之
（日本仏教史学）

本研究は、「建学の精神」の具現化を課題とし、以下の３つの視点から研究を推進するものである。

①「建学の精神」の現代的表現化

②「人間学Ⅰ」の共通資料集の作成

③「建学の精神」を活かした学科教育の在り方

「建学の精神」とは、直接には大谷大学初代学長清沢満之による「開校の辞」（明治34年、移転開校式）と、第３代学長佐々木月樵による「大谷大学樹立の精神」（大正14年入学者宣誓式訓辞）を指す。

視点①では、本学が今日まで教育の根幹に据えてきた両学長の訓辞の意義を再確認し、これを現代的形で表現していくことを目指す。両訓辞は、それぞれ「私立学校令（明治32年公布）」と「大学令（大正７年公布）」における宗教教育に対する（厳しい）制約のもとで公開されたものである。本年では、そのような当時の歴史的状況を加味したうえで両訓辞の持つ意義を再検証し、その精神が持つ現代的意義の確認と表現を含めた具現化の問題について検討した。

視点②では、本学の「建学の精神」に基づく教育を最も体現する科目である「人間学Ⅰ（文学部）」あるいは「仏教と人間Ⅰ（短期大学部）」に関して、教育の基礎となる共通資料の作成に向けた検討が期待された。当初は「人間学」における仏教教育全般にわたる共通資料の作成が目指されたが、現在は焦点を絞り、「建学の理念」に特化したテキスト（両訓辞の原文に脚注を付し、英訳、現代語訳、解説を加えたもの）を作成する方向で検討が進められている。上記①の研究内容を踏まえ、学生と教職員が共通に「建学の理念」を学ぶことができるような基本テキストを作成することが現実的であると思われるため、その方向での検討に入っている。

視点③は、以上の①および②での成果を踏まえ、大谷大学の建学の精神と各学科における教育との連関について検討作業をおこなうことを目指すが、現在この件については着手することができないでいる。今後の課題として残される。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・准教授　井上 尚実
（真宗学）

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。本年も〈英米班〉〈ドイツ・フランス班〉〈東アジア班〉がそれぞれの言語文化圏を担当し、以下のような具体的研究テーマにそって研究を進める。

〈英米班〉

〈研究テーマ〉

①英語圏における仏教研究動向の把握

②真宗・仏教関係の国際学会における研究発表、関係文献の翻訳、シンポジウムの企画

〈活動内容〉

①国際学会への参加

国際真宗学会（5.30–6.1 バンクーバー）、世界哲学会議（8.4–10 アテネ）、アメリカ宗教学会（11.23–26 ボルチモア）等に研究員を派遣し、最新の仏教研究についての情報収集や研究交流を行う。

②ELTEブダペスト仏教学センターとの合同シンポジウム

学術交流協定に基づいたエトヴェシ・ロラーンド大学（ELTE）のブダペスト仏教学センター（ELTE Budapest Center for Buddhist Studies）と大谷大学真宗総合研究所国際仏教研究の第１回合同シンポジウムを行う（10.26–27 ブダペスト）。テーマは「仏教における信仰」。

③真宗近代教学アンソロジー、Cultivating Spirituality（SUNY, 2011）の出版記念シンポジウムの企画

2014年度に記念シンポジウムを開催できるよう、企画立案し準備を進める。

④公開講演会の開催

国内外で活躍している仏教学・真宗学関係の研究者

を招聘し、公開講演会を今年度中に4回開催する。

⑤データ収集と整理

これまで収集してきた図書のうち未整理のものを利用できるように整理したうえで、書籍・論文データベースをアップデートし公開する。

⑥新たな翻訳プロジェクトの立案

昨年度まで取り組んできた翻訳プロジェクト（佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」）が完了したので、新たなプロジェクトを企画立案する。

〈ドイツ・フランス班〉

〈研究テーマ〉

仏教・他宗教比較研究

①「プロテスタント神学との対話研究、および翻訳出版」

②「近代化と宗教：主に浄土真宗の社会学的観点からの研究、および翻訳出版」

③「国際学会での研究発表」

〈研究の目的〉

①「プロテスタント神学との対話研究、および翻訳出版」

浄土真宗とプロテスタント神学との対話・比較研究を継続し、その成果を出版することが本研究の目的である。

具体的な研究として、マールブルク大学神学部Dietrich Korsch教授の*Martin Luther: Eine Einführung*の翻訳出版を計画している。本書は数多あるルター研究書の中でも、ルターの文化史的影響を中心に考察した稀な本であり、日本語で出版する意義は大きい。

②「近代化と宗教：主に浄土真宗の社会学的観点からの研究、および翻訳出版」

フランス国立高等研究院（EPHE）の宗教社会学部門との交流を継続していく。具体的な研究として、2010年5月に"National Identities and Religion:A French-Japanese Comparative Approach"というテーマのもとで開催されたシンポジウムの口頭発表をもとに、発表者（ロバート・F・ローズ、村山保史、藤枝真、番場寛）が発表原稿をフランス語で論文化した。これらの論文を、EPHEのフィリップ・ポルティエ教授の協力を得て、フランス語で出版する予定である。

③「国際学会での研究発表」

2013年8月4日～10日にギリシャ・アテネで開かれる第23回世界哲学会議 World Congress of Philosophyでの発表を予定している。仏教哲学や生命倫理などの部会で発表・交流することで、研究班の研究成果を発信し、また現在の研究動向を確認するというねらいがある。

〈東アジア班〉

〈研究テーマ〉

中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究

〈研究目的〉

中国華北地域、東北地域（いわゆる満洲）、東部モンゴル地域（内モンゴル自治区東部）における宗教及び関連文化の諸相を、歴史史料によって再構成し、さらに現地調査によって明らかにしていく。

〈研究方法〉

本学と中国社会科学院歴史研究所（北京市）との学術協定に基づき、双方の研究者が往来して本テーマに関わる共同研究会を実施する。また、現地関係者の協力を得て当該地域に存する仏教遺跡あるいは仏教寺院など宗教施設の探訪調査を行う。

〈研究計画〉

共同研究「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」の推進

①前記研究機関より研究者を招聘し、共同研究ならびに公開研究会を開催する。

②前記研究機関を訪問し、共同研究及び現地調査を行う。

西蔵文献研究

チベット語文献及びパーリ語貝葉写本のデータベース化

研究代表者・教授　福田 洋一
（仏教学）

大谷大学は北京版チベット大蔵経や貴重な蔵外文献などをはじめとする多数のチベット語文献、タイ王室寄贈の多数のパーリ語貝葉写本を所蔵している。これらは、本学はもとより国内外のチベット研究やパーリ仏教研究のための重要な資料となっている。本研究は、これら本学所蔵の重要な文献資料を

(1)専門の研究者が十分に活用できるよう整理し、データベース化すること

(2)重要・貴重と思われるものについては電子テキスト化・デジタル画像化して公開すること

を目的としている。この目的を達成するために、2013年度は以下の研究をおこなう予定である。

1．チベット語文献の電子テキスト化

本研究班ではこれまで、本学所蔵のチベット語文献のうち稀覯書である『量決択註』（蔵外No. 13971）および『サンプ明鏡史』（蔵外 No. 13981）を研究対象としてきた。今年度もその研究を継続する。『量決択註』については、これまで、そこに含まれているダルマキールティの『量決択』偈の部分が一目で分かるようにし、偈のサンスクリット・テキストも掲げ、偈と註釈との対応関係がわかるように工夫した校訂テキストを作成し、第１章および第２章について、そのPDFファイルをネット上で公開した。本年度は第３章の校訂テキスト公開をめざすとともに、本テキストの和訳研究に取り組む。『サンプ明鏡史』については、昨年度どおり、その校訂テキストの作成と訳注の作成を平行しておこなう。以上２つの文献に加え、本年度は、同じく稀覯書である『倶舎論語義解明・善説の陽光』（蔵外No. 13972）のテキスト翻刻に取り組む。

2．北京版チベット大蔵経の写真撮影とネット上での公開方法の検討

北京版チベット大蔵経のうちテンギュルの撮影を継続するとともに、蓄積された画像データの公開方法について検討する。また、公開中の北京版チベット大蔵経オンライン目録のデータを見直し、必要な修正を施す。さらに、大谷大学所蔵蔵外文献目録の電子データについてもネット上での公開をめざす。

3．パーリ語貝葉写本のデジタル化

本学所蔵の稀覯写本『マハーブッダグナンヴァータ・アッタカター』のローマナイズを進めるとともに、重要あるいは貴重な写本の撮影と整理をおこない、デジタルデータ公開に向けての検討をおこなう。

4．寺本婉雅の日記の翻刻

村岡家所蔵・寺本婉雅関連資料に含まれる未公刊の寺本婉雅の日記二種の研究をおこなう。本年度は、1899年９月１日～1900年12月31日［最終記事は1900.7.27］間の日記（『新旧年月事記』の表題を持つ）の翻刻テキストの公開をめざすとともに、1901年11月27日～1902年８月26日間の日記（『第二回西蔵探検日誌：在北京之部』の内題を持つ）の翻刻をおこなう。

5．海外の研究者、研究機関との交流

モンゴル国ウランバートルにおいて開催される第13回国際チベット学会（７月21日～27日）への参加する。ポルトガルで開催される第７回東南アジア研究ヨーロッパ協会国際会議（７月１日～７日）に参加する。モンゴル国立大学との共同研究をおこなう。また、タイ・バンコクの寺院でのパーリ語貝葉写本調査をおこなう。随時、海外のチベット学研究者による公開研究会を開催する。

大谷大学史資料室

大学史関係資料の収集・整理

室長・准教授　藤田 義孝
（フランス文学）

本資料室の任務は、大谷大学の歴史に関わる様々な資料を収集・整理し、適切な保管の方策を講じた上で、それらを広く公開し活用できるようにすることである。

教育・研究機関としての大学が、いわゆる大学人に対してだけでなく、広く社会に対して自らの存立の根拠と理念を明らかにするには、それぞれの大学が自らの起源と歴史を語る言葉を持たなくてはならない。本学においてそのための基本資料となるのが、これまでに刊行されてきた『大谷大学百年史』などの出版物である。ただし、こうした成果にもかかわらず、未だ十分に整理できていない資料があり、それらの分類整理を進めながら、部分的にでも公開できる方法を検討していく。それと並行して、経年劣化にさらされている西方寺の貴重なフィルム資料を、スキャナーでデジタル化して保存する作業も継続する。

また、今年度も引き続き、全国111の教育機関が加盟する全国大学史資料協議会の研究会（西日本部会）に参加することで、諸機関との可能な連携や、アイデアの交換、ノウハウの共有を図り、研究会から持ち帰った成果を本学における大学史関係資料の保存・公開方法の改善に役立てていく。

なお、今年は大谷大学が現在の場所（京都市北区小山上総町）に移り、「赤レンガ」こと尋源館が完成してちょうど百年目にあたり、学生会主催の写真展など各種の催しが企画・実施されている。大谷大学資料室もまた、図書館１階の入り口に借り受けることのできた大学史史料展示ケースを最大限に活用し、大谷大学や尋源館の歴史に関わる展示を行う予定である。

東本願寺海外布教資料室

大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の整理

室長・教授　桂華 淳祥
（東洋史学）

大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」に含まれる海外布教関係部分は、おもに20世紀前半における東本願寺の海外布教に関する公文書の綴りで、当時の海外布教の実態を伝える貴重な資料である。しかしそれは事務書類綴りとして未整理の状態で残されているもので、その内容はもとより点数すら正確には把握されていない。したがってこの状態が続けばその存在も知られず、あるいは散逸の恐れもある。

本資料室の目的は、これら未整理の資料を整理して「資料一覧」を作成するとともに、資料自体を適正な形態にまとめて保存することにある。これによって本資料の半永久的な保存が可能になるとともに、今後、当該時代の東本願寺の活動をはじめとする様々な研究に寄与することが期待される。ここに本資料を整理する意義がある。

資料には仮番号を付しており、合計165点ある。2012年度現在80番台に取りかかっており、本年度はそれを続行する。具体的な方法は下記の通りであるが、史料の性質上、(a)真宗総合研究所と(b)図書館・博物館事務室との２カ所において行う。

①事務書類綴りの状態になっている資料についてその内容を確認し、必要事項を記録する(b)。

②記録された必要事項を精査しつつ「資料一覧」を作成する。また精査に必要な情報を得るため、海外布教に関する文献（当該期東本願寺発行の「機関誌」など）によって、人事異動・布教所開設などに関する記事を整理する(a)。

③作成された「史料一覧（原案）」と対比し、内容を確認した資料を適正な形態にまとめて保存可能な状態にする(b)。

なお昨年度には、将来、他の機関との情報共有をする場合、それをより円滑にするために、従来の「資料一覧」の体裁を変更し、旧一覧から新一覧へのデータの移行作業を始めたので、これも合わせて行う(a)。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築

室長・准教授　藤田 義孝
（フランス文学）

本学に所蔵された多くの貴重な文献資料を半永久的に保存し活用していくため、資料をデジタル・データ化し、分類整理・保存する作業を引き続き進めていく。

その一環として、2010年度より本学図書館所蔵古典籍を書誌データベースとして登録する作業を続けているが、デジタル・アーカイブ化の完了までには、なお歳月を要すると見込まれる。そのため、デジタル化したデータを広く公開し利用できるシステムの構築にも取り組まなくてはならないが、当面は完全なシステム構築を目指すよりも、デジタル化の終わった資料から何点か拾い上げて紹介しつつ、ある程度は利用可能な形でも公開していくという、いわばオンラインのデジタル博物館のようなものを構築し、大学あるいは学科のホームページからリンクするといった形のほうが現実的ではないかと思われる。そのような方向でシステム構築と資料の活用が可能かどうか検討したい。

また、大谷大学の学内学会による様々な学術刊行物をデジタル化して公開し、オンラインで容易に閲覧・利用できる体制を整えていくことも必要である。そのために、まずは学内学会と連絡を取り、研究成果のオンライン公開状況に関する情報の収集と整理から始めなくてはなるまい。過去の論文著者のすべてにオンライン公開の許諾を得るためには煩雑かつ膨大な事務連絡と確認作業が要求されるが、その仕事をどのように遂行するかという点も検討の必要があるだろう。

2013(平成25)年度「一般研究」研究組織一覧

【共同研究】

研究名等	研究課題及び研究組織	
【2012~2014年度「科研費」採択】 一般研究（松川班）	研究課題	新出土仏教遺物と文献史料の統合による13～17世紀北アジア史の再構築
	研究代表者	松川　節
	研究員	松川　節（教授・モンゴル学）
		三宅伸一郎（准教授・チベット学）
	協同研究員	清水奈都紀（奈良大学非常勤講師）
	研究協力員（支援）	伴　真一朗（博士後期課程修了）
【2013~2015年度「科研費」採択】 一般研究（武田班）	研究課題	デジタルアーカイブ技術による契丹国の歴史考古言語資料の復原的研究と集成
	研究代表者	武田和哉
	研究員	武田和哉（准教授・人文情報学）
		松川　節（教授・モンゴル学）
	協同研究員	町田吉隆（神戸市立工業高等専門学校教授）
		等々力政彦（北海道大学スラブ研究センター共同研究員）
		高橋学而（福岡文化学園博多女子高等学校教諭）
		藤原崇人（関西大学東西学術研究所非常勤研究員）
		武内康則（日本学術振興会特別研究員PD）
【2013~2015年度「科研費」採択】 一般研究（村山班）	研究課題	日本における西洋哲学の初期受容―フェノロサの東大時代未公開講義録の翻刻・翻訳―
	研究代表者	村山保史
	研究員	村山保史（准教授・西洋哲学）
		朴　一功（教授・西洋古代哲学）
		渡辺啓真（教授・倫理学）
	協同研究員	池上哲司（教授・倫理学）
		藤田正勝（京都大学大学院教授）
		竹花洋佑（本学非常勤講師・特別研究員）
		西尾浩二（本学非常勤講師・特別研究員）
		Michael J. Conway（本学非常勤講師）
【2013~2016年度「科研費」採択】 一般研究（小谷班）	研究課題	スティラマティの倶舎論注釈書『真実義』梵文写本第一章の研究
	研究代表者	小谷信千代
	研究員	小谷信千代（本学名誉教授・特別研究員）
	協同研究員	秋本　勝（京都女子大学教授）
		本庄良文（佛教大学教授）
		松田和信（佛教大学教授）
		福田　琢（同朋大学教授）
		箕浦暁雄（准教授・仏教学・人文情報学）
		上野牧生（短期大学部助教・仏教学）
		加納和雄（高野山大学助教）
		松下俊英（本学非常勤講師・特別研究員）
【予備研究】 一般研究（関口班）	研究課題	自主的主体的に学習する子どもを育てる教育実践の実証的研究
	研究代表者	関口敏美
	研究員	関口敏美（教授・教育学・教育史）
		望月謙二（教授・国語科教育学）
		市川郁子（准教授・教育学　音楽科教育）
		山内清郎（准教授・教育人間学・臨床教育学）
	協同研究員	岩渕信明（特別任用教授　社会科教育）
		髙山芳治（特別任用教授・社会科教育学）
		大野　僚（本学非常勤講師）

研究名等	研究課題及び研究組織	
【予備研究】 一般研究（柴田班）	研究課題	学際的利用を可能とするマルチプラットフォーム対応型系図表示ソフトウェアの研究
	研究代表者	柴田 みゆき
	研究員	柴田 みゆき（准教授・情報処理学）
		宮下 晴輝（教授・仏教学・人文情報学）
		酒井 恵光（講師・計算機科学）
	協同研究員	松浦 亨（北海道大学病院准教授）
		杉山 正治（立命館大学情報理工学部助教）
		生田 敦司（本学非常勤講師）
		横澤 大典（本学非常勤講師）
		清水 利明（東京理科大学専門職大学院非常勤講師 比較法学研究センター特別研究員）
【予備研究】 一般研究（渡部班）	研究課題	80年代後の北京語に関する調査研究
	研究代表者	渡部 洋
	研究員	渡部 洋（准教授・中国語・近世の中国語文法）
		柴田 みゆき（准教授・情報処理学）
	協同研究員	清水 由加里（本学非常勤講師）
		早川 智美（本学非常勤講師）

【個人研究】

研究名等	研究課題及び研究組織	
【2010~2013年度「科研費」採択】 一般研究（飯田班）	研究課題	民族文化祭の総合的研究
	研究代表者	飯田 剛史（教授・社会学）
【2010~2013年度「科研費」採択】 一般研究（阿部班）	研究課題	変動期の社会における法秩序の再構築―南アフリカとカンボジアの比較社会学的研究
	研究代表者	阿部 利洋（准教授・社会学）
【2011~2012年度「科研費」採択】 一般研究（西尾班） ※研究期間1年間延長	研究課題	プラトンの中期イデア論の生成
	研究代表者	西尾 浩二（本学非常勤講師・特別研究員）
【2011~2014年度「科研費」採択】 一般研究（ダシュ班）	研究課題	日本で発見されたオリヤー語『マハーバーラタ』「津島貝葉」の校訂テキスト作成
	研究代表者	Dash Shobha Rani（講師・インド学・仏教学）
【2012~2013年度「科研費」採択】 一般研究（黒澤班）	研究課題	保育者の悩み・学習ニーズの変容と同僚性を基礎とした研修に関する実証的研究
	研究代表者	黒澤 祐介（任期制助教・特別研究員）
【2012~2013年度「科研費」採択】 一般研究（宋班）	研究課題	「民族学校」の日韓比較研究―日本の「朝鮮学校」と韓国の「華僑学校」を中心に―
	研究代表者	宋 基燦（任期制助教・特別研究員）
【2012~2014年度「科研費」採択】 一般研究（脇中班）	研究課題	触法知的障害者の更生と地域生活定着を促進するピアサポートプログラムの開発と評価
	研究代表者	脇中 洋（教授・発達心理学・法心理学）
【2012~2014年度「科研費」採択】 一般研究（河﨑班）	研究課題	バガヴァティー・アーラーダナーの新校訂本作成と全訳によるジャイナ教の断食死研究
	研究代表者	河﨑 豊（任期制助教・特別研究員）
【2012~2014年度「科研費」採択】 一般研究（清水班）	研究課題	タイ国を中心とする東南アジア撰述仏教説話写本の研究
	研究代表者	清水 洋平（本学、神戸国際大学非常勤講師・特別研究員）
【2012~2014年度「科研費」採択】 一般研究（竹花班）	研究課題	後期田辺哲学における象徴概念の研究
	研究代表者	竹花 洋佑（本学非常勤講師・特別研究員）
【2013~2015年度「科研費」採択】 一般研究（赤枝班）	研究課題	グローバル化時代における「人権」概念とセクシュアル・マイノリティの包摂
	研究代表者	赤枝 香奈子（任期制講師・社会学）

研究名等	研究課題及び研究組織
【2013~2015年度「科研費」採択】 一般研究（高橋班）	研究課題　共感覚の進化的基盤を探る 研究代表者　高橋　真（任期制講師・比較認知科学）
【2013~2015年度「科研費」採択】 一般研究（白館班）	研究課題　インド・チベットにおける般若学の研究 研究代表者　白館戒雲（本学名誉教授・特別研究員）
【2013~2015年度「科研費」採択】 一般研究（松下班）	研究課題　『中辺分別論』の未解読チベット語註釈写本の研究 研究代表者　松下俊英（本学非常勤講師・特別研究員）
【本研究】 一般研究（中森班）	研究課題　日本泳法　神統流の伝承と史的実相に関する調査研究 研究代表者　中森一郎（教授・体育学）
【予備研究】 一般研究（田中班）	研究課題　摂食抑制及び食べ過ぎに関する認知的研究 研究代表者　田中久美子（准教授・社会心理学・教育心理学）
【予備研究】 一般研究（福島班）	研究課題　戦後沖縄芸術思想史論―彫刻家・金城実の親鸞思想に関する領域横断的研究― 研究代表者　福島栄寿（准教授・近代日本仏教史・近代日本思想史）

2013(平成25)年度「一般研究」研究目的紹介

共同研究

新出土仏教遺物と文献史料の統合による13～17世紀北アジア史の再構築

研究代表者・教授　松川　節
(モンゴル学)

近年の歴史学的碑刻・文書調査と考古学的発掘調査により、13世紀～14世紀前半のモンゴル支配時代、そして14世紀後半～17世紀のポスト・モンゴル時代において、北アジアで独自の仏教文化が存在していたことが明らかになりつつあるが、それらの仏教文化に通時的な連続性・継承性があるか否かという問題はほとんど研究されず、看過されてきた。本研究は、モンゴル高原のオルホン河・トーラ河流域を調査対象域とし、新たに出土・発現した13世紀～17世紀までの仏教遺跡や文字資料が、従来の文献学的歴史研究といかに整合性を持つか、また統合可能かを明らかにしつつ、仏教をキーワードとして浮かび上がる北アジア史の新たな地平を追究すること、すなわち、新出土仏教遺物と文献史料の統合による13～17世紀北アジア史の再構築を目的とする。

本研究は2012年度から3年計画で推進しており、以下の4つの研究基軸を設けている：

①13・14世紀カラコルムにおける仏教遺跡の調査・研究

1．新たに発掘された興元閣址から出土した遺物を考古学的、歴史学的、保存科学的な各側面から調査・研究し、その来歴及び年代を比定するためのデータを抽出する。

2．同様に、仏教学・仏教美術史の専門研究者が、チベット仏教的、ウイグル仏教的、西夏仏教的、契丹及び中国仏教的な側面から比較研究を行い、カラコルムにおけるモンゴル仏教の諸要素を抽出する。

3．13・14世紀モンゴル仏教に関わる文献記述を博捜し、その中でカラコルムに関わるものをデータベース化し、出土遺物と照合する。

②15～17世紀カラコルム廃墟とエルデニゾー寺院との関連についての調査・研究

1．現存するエルデニゾー寺院の諸堂宇・外壁について、考古学的、寺院建築学的、保存科学的な調査を行い、堂宇の基礎部分がモンゴル帝国時代に建造されていた可能性を検証する。

2．エルデニゾー博物館及びエルデニゾー寺院に所蔵される古文書の書誌情報データベースを作成し、エルデニゾー寺志に関する文字資料を学界に公表する。あわせて、モンゴル国最大の仏教寺院ガンダン寺図書館及びモンゴル国立図書館に所蔵される資料についても基礎的な研究を行い、関連資料を抽出する。

③出土遺物と文献史料との整合性の研究

1．13～20世紀までのモンゴル仏教史に関わる文献史料のうち、モンゴル文、チベット文、漢文について、出土遺物によってもたらされた新たな史実と文献史料との整合性を検討する。

④北アジア仏教史

1．以上の研究を通して拓かれる新たな北アジア仏教史を記述し、国際シンポジウムを開催して討議・検討し、評価を受ける。

2012年度の研究成果を承け、2013年度は、これらの研究計画のうち、①の第3項および②の第1項について重点的に推進し、その成果を③に繋げていくことを目標とする。

共同研究

デジタルアーカイブ技術による契丹国の歴史考古言語資料の復原的研究と集成

研究代表者・准教授　武田 和哉
(人文情報学)

本研究は、契丹国（遼朝）に関する新出現の遺跡・出土文字史料・文化財などを対象とし、極力コストを抑えた手法を活用しつつ、研究資源として他の研究者も利用可能な客観的資料としてのアーカイブ化を行うことを目指すものである。

契丹国（遼朝）〔以下「契丹国」と略称する〕は、10世紀に北アジア遊牧民が主導して建設した国家で、その領域には遊牧民の契丹人のほかに定住民の漢人などが居し、北アジア的要素と中華的要素が混合した独特

の制度・文化が形成された。かかる契丹国の歴史展開の中には、中華帝国と周縁諸民族との交渉を軸に展開してきた東アジア史の縮図を見いだすことができ、その重要性と歴史的意義が以前から認識されて研究対象となってきたが、この国の史実を伝える文献史料は少なく、研究展開上では困難な点が多かった。

近年、契丹国の中枢地域であった中国内蒙古自治区・遼寧省およびモンゴル国内において新たな遺跡や文化財が続々と発見されつつある。これらには、既存の乏しい文献史料等を補完し、従来研究の成果・見解等を大きく塗り変える可能性を有するものが多い。ただし、残念ながら現時点では報告は少なく、また図面などの客観的資料への加工もあまりなされていないため、学術成果として取り扱うにはやや困難な状態にある。

このほか、戦前の時期に日本人による調査で得られた写真・図面には、今となっては貴重な遺跡状況や地形などの情報が記録されており、これらも学術資料として重要であるが、これらも研究利用に供する状態にまで整理・分析作業が進捗できていない場合が多い。

本研究では、国内外の関係機関の協力を得て意見交換や交流を行い、多角的視点からの各種の資料評価を行うとともに、必要に応じて現地の遺跡・文化財の実見や再確認の作業を行う。具体的には以下の活動を計画している。

- 中国内蒙古自治区赤峰市・通遼市および遼寧省の各管内、さらにモンゴル国内の契丹時代の遺跡や文化財に関する調査で得た写真・図版、その他これまでの調査で得ている成果や航空写真など蓄積成果も含めてその資料価値の分析・評価を行い、重要と思われるものについては、その価値を損なわない形でのアーカイブ化を行う。
- 過去の日本人研究者の調査によって日本国内に将来された文化財や写真・図版等の資料に関しても、関係保管施設との連携・協力等により、同様にアーカイブ化を目指す。

以上の活動を行い、研究班内で協力・分担して成果をとりまとめる。また、検討会を開催して外部研究者の指摘なども加味した上で、最終的には成果報告を作成する予定である。

共同研究

自主的主体的に学習する子どもを育てる教育実践の実証的研究

研究代表者・教授　関口 敏美
（教育学・教育史）

現在の学校教育に求められているのは、「自ら学ぶ力」を育む教育、すなわち、変動の激しいグローバルな知識基盤社会を生き抜くために必要な「確かな学力」を見据えた「自らが追究する力」を育む教育である。

ところが、近年は、学級崩壊によって一斉授業が成り立ちにくい場合もあり、学年があがるにつれて学級崩壊をひき起こす率が高くなることは一般によく知られている。これでは、基礎学力の保障はおろか、将来、知識基盤社会を生き抜かねばならぬ子どもたちに「自ら学ぶ力」を習得させることさえ困難であるといわざるをえない。

そこで、本研究では、「自ら学ぶ力」の基盤となる基礎学力を保障しつつ「自ら学ぶ力」を習得させるために、京都市内の小学校に協力を仰ぎ、学級崩壊対策としても有効な教育方法を模索することを課題としたい。

研究の計画としては、第一に、京都市立小学校（研究協力校）におけるフィールド調査を通して教育実践の観察・参観を行うこと。研究協力校とは、社会科、国語科、音楽科、道徳などで連携活動を行っているので、引き続き継続する。

第二に、富山市立堀川小学校・福岡市立四箇田小学校（研究対象校）におけるフィールド調査を通して、「自ら学ぶ力」を育む教育実践の観察・参観を行うこと。堀川小学校ではクラス全体が共感しつつ追究を深める学習集団を育てる実践に、四箇田小学校では一人一人が自分のペースで主体的に学べる「ひとり学習」に注目して、教育方法を探りたい。

2013年度より本学科にも大学院（修士課程）が開設される運びとなり、高度専門職業人として、複雑な社会変化の中で多様化する教育課題に対応できる「実践的研究力」および教育現場においてリーダー的役割を果たすことのできる「研究的実践力」を備えた教員養成をめざすこととなった。

このため第三に、協力校と連携して大学院の授業を

本研究に組み込み、①院生に学級経営や教科指導の実際を観察させ、協力校との共同研究会にて報告させ、②その報告を協力校・本学科の教員が検討して、双方にとって新たな知見を見いだすこと。以上のことを通して、「自ら学ぶ力」を育む教育方法を解明することが本研究の目的である。

共同研究

学際的利用を可能とするマルチプラットフォーム対応型系図表示ソフトウェアの研究

研究代表者・准教授　柴田 みゆき
（情報処理学）

1．研究の背景

系図は連続する系譜・系統を直観的に表示できる。このため、系図は、人文科学・社会科学・自然科学を問わず広く利用される。しかし、従来の系図表示ソフトウェアは学術的な利用に向かない。その理由は、以下の３点である。

(1)複雑な婚姻関係は表現できない場合が多い。たとえ入力できても、個性の非表示や２箇所以上の表示となる。そのため、１回の視認で系図を直観的に理解することを妨げている。

(2)個性の理解に必要な全ての付帯情報を同時に表示できない。

(3)史料にみられる一系系図や横系図のような、多様な系図様式に対応できていない。

上記の解決に、我々は「不可視結節点」を用いたデータ管理手法“WHIteBasE”を提案し、その有用性を確認するプロトタイプ・ソフトウェアを作成した。これは線分交叉表示を伴った個性と線分の自由配置が可能であり、学会での評価が高い。しかし、従来の紙媒体上で表現されてきたような利便性を獲得するには、応用機能のさらなる拡張が必要である。

2．本研究の目的

本研究の目的は、以下の２点である。

2-1. 系図表示の調査とアルゴリズムの研究

系図上に表される「親子関係」には、血縁だけでなく、養子など、社会的な関係も含まれる。これら社会的な親子関係の表示のために、以下の２点の研究を人文科学分野や医学分野を中心に行う。

(1)個性の社会的な関係に基づく関係性（養子・猶子（職位継承等で用いられる社会的な「子」）など）の表示

(2)従来の系図表示ソフトウェアになかった関係性（神話の叙述や、医学における代理出産のような、通常の婚姻・生殖活動によらない子孫の誕生など）の表示

上記の結果を踏まえてアルゴリズムを考案し、WHIteBasEの機能を拡張する。

2-2. 実装による有用性確認

タブレット端末は従来型PCよりも使い勝手について好感触が得られるとの先行研究がある。大谷大学でも人文情報学科の全学生にiPadを配布し、教育の場におけるタブレット端末利用の有用性を確認した。タブレット端末は上記iPadのほかに、AndroidやWindows8のように動作可能なOSが増え、それぞれに市場での支持を獲得している。

この現状に対応し、かつ上記研究の有用性を確認するために、タブレット端末への移植が必要である。まず、各OSのタブレット端末を対象に、快適な操作性や視認性の研究を行う。

3．本研究の意義

本研究の成果により、学問領域を問わず系図表示ソフトウェアを利用することができる。さらに、タブレット端末に対する技術的研究成果は、様々なタッチパネルのインタフェースにも応用が可能となる。

これらの研究成果を、国内外の学会にて発表し、年度末に報告書を作成することで、社会に公表する。

共同研究

80年代後の北京語に関する調査研究

研究代表者・准教授　渡部　洋
（中国語・近世の中国語文法）

先人の北京語研究は老舎が亡くなった60年代までの言語資料を使用したものが中心で、その後研究にあまり進展はない。だが、80年代以後中国の経済発展は70年

代までの中国社会を大きく変え北京の市井で話す北京語にも大きな影響を与えていると考えられる。そこで本研究の目的は現代の北京語を使用したドラマ、映画、地元新聞等の資料に対し言語面での調査と研究を行い、80年代後の北京語にどのような変化が生じているのかを知るための基礎資料を作成することにある。基礎資料の主なる内容は北京語資料の解読結果の提示、70年代までの北京語とその後の北京語との比較対照による語彙語法の分析結果、80年代以後の新語・流行語についての調査結果とその語彙索引等である。

13世紀に元王朝が登場し今の北京に大都という都を置き、その後明代、清代と中華民国建国までゆうに600年余り北京が国の文化政治の中心であった。言語面においても北京官話が形成され中華人民共和国になっても北京官話を基礎に標準語が作られる。北京官話の特徴は北京の市井で話される言葉にも受け継がれて一般的にそれを北京語と呼んでいる。この北京語については太田辰夫氏がすでに詳細に研究されていて北京語に七つの特徴ある語彙があることを明らかにされている。また、他に多くの研究者も北京語について論文を発表され成果を挙げておられる。しかし、これまでの北京語についての研究はほとんどが北京語で書くことを使命としていた作家老舎が活躍していた時代までの小説や話劇等を対象としたものであった。その研究成果が現在の北京語に適応できるのかどうかははなはだ疑問である。北京語の状況は70年代まではさほど変化のないものであったが、しかし80年代後中国の急激な経済発展により北京に住む人々の生活も一変し言葉にも大きな変化がみられる。特にインターネットの普及により数日前に放映された外国のドラマや映画を字幕つきで簡単に見られるようになっている。このような状況は当然言語面にも影響を及ぼし、日本語や英語の音訳された言葉が短期間で違和感なく受け入れられている。また、80年代後に生まれ育った世代とそうでない世代とで使う言葉や言葉の使い方にも違いが生じているようである。以上のことから社会変貌が顕著になっていく80年代から現在までの北京語を新たに調査し研究する必要があるのではないかと着想するにいたった。過去の北京語研究の成果を踏まえ、80年代後の北京語の変化を明らかにしたいと考えたのである。

これまでの北京語研究においては主に小説や話劇の台本等の紙ベースの資料を使っていたが、本研究においては北京を舞台にしたドラマや映画のDVD等も言語資料として使うつもりである。以前と違い中国ではドラマの視聴率は高く放送局も多額の予算をドラマ制作に投入し俳優の言語指導も入念に行っている。そこで小説や話劇以外に80年代以後の北京を舞台にしたテレビドラマ、映画、80年代後に発行された地元新聞等を使って語彙、語法、新語、流行語、各世代別の用語の違い等を考察したいと考えている。また、以上のような日本での研究活動以外に北京へ行き世代別の使用言語の違いを知るための調査や研究会で蓄積したデータの確認を行うつもりである。そして北京語についてのデータをある程度整理した後、上海にも行き呉語の影響が見られる上海の標準語の調査を行い北京の標準語との比較も行いたいと考えている。

今後の研究対象としては以下の６点の資料を考えている。

①「裸婚時代」(2011年のテレビドラマ30集DVD)
②「裸婚—80后的新结婚时代」(2010年の小説：著者唐欣恬)
③「北京愛情故事」(2012年のテレビドラマ39集DVD)
④「北京愛情故事」(2010年の小説：著者何彦平)
⑤「剪头匠」(2006年の映画：「胡同の理髪師（日本名)」DVD)
⑥北京晩報（80年代～現代：国際日本文化研究センター所蔵)

以上の６点の資料について研究を行い北京語についての基礎資料やデーターベース（テキストの作成　訳注　北京語の語彙索引　新語・流行語についての注釈とその索引）を作成したいと考えている。

資料解読の目的で、毎月２回のペースで大谷大学にて研究集会を開催する。研究代表者の渡部洋（大谷大学准教授）は、研究分担者・研究協力員と密接に連絡を取りつつ、研究全体の推進を指揮・監督する。研究分野としては、中国語資料の解読及び北京語についての文法解釈を担当する。研究分担者の早川智美（大谷大学非常勤講師）は中国語資料の解読や中国近世にさかのぼることのできる語彙についての調査を行い、研究分担者の柴田みゆき（大谷大学准教授）と協同で語彙についての情報をデータ化し時代背景との関連性を探る。研究協力員の清水由香里（大谷大学非常勤講師）は中国語資料の解読や新語・流行語についての調査を担当する。研究協力者の湯佳偉（首都師範大学留学生）は北京語の特殊語彙の用法についての調査を担当する。

個人研究

民族文化祭の総合的研究

研究代表者・教授　飯田 剛史
（社会学）

民族文化祭は、1980年代に在日コリアンの文化運動として生まれた。それ以後多様なありかたの民族文化祭が、京阪神地域を中心に、全国100か所以上で催されるようになっている。参加者は、在日コリアンにとどまらず、日本人、中国人、フィリピン人、ブラジル人などに広がり、その主旨も、特定の民族アイデンティティを表現するものから多文化・多民族共生を訴えるものに重点が変化してきている。

研究目的は、これら民族文化祭の現況と問題点を明らかにすることを通して、日本社会の寛容性の発達、多民族共生の展開の可能性を探ることにある。これまで、日本各地の民族祭りの調査と資料収集、研究会および民族まつりシンポジウム開催などをすすめて来た。

今年度は、国内および国外の学会での研究報告、補足調査、総合的報告書作成を計画している。

個人研究

変動期の社会における法秩序の再構築
―南アフリカとカンボジアの比較社会学的研究

研究代表者・准教授　阿部 利洋
（社会学）

南アフリカでは、前年度の調査を踏まえ、とりわけ社会資源の再配分過程において、近年緊張関係が再び高まっている人種間関係に関する聞き取りを継続する。紛争後に被害への対処を行う選択肢としては、裁判を通じた刑罰があるが、南アフリカでは、「非白人国民」を「より被害をこうむった社会集団」であると規定し、経済的機会の優先配分を行ってきた。しかし現実には、その実施状況をめぐる軋轢が生じ、そこに政治力学の変化が重なり、新たな社会的課題が浮上している。紛争後の取り組みとして「和解」を「正義」に優先させた南アフリカが、その後どのようにして正義の領域を再検討してきたのか、ジョハネスバーグとケープタウン地域において、関連する研究者およびNGO活動家と意見交換する。

カンボジアでは、前年度に開催した関連研究者とのワークショップの各論文を、執筆者同士で意見交換しながら修正し、出版原稿として再度共同検討の機会を設ける。また、特別法廷の進行プロセスが直面している様々な問題（予算不足や被告の死去および健康状態の悪化など）を反映する考察の枠組みが求められる。本研究では、表出主義（expressivism）およびドラマトゥルギーの枠組みに着目し、カンボジア人市民の意識調査を通じて、現地協力研究者との共同執筆論文を作成する。

理論的観点としては、移行期正義分野に対する社会運動論の適用を検討する。従来、政治学・国際関係論が主流であった移行期正義の理論構築からは、目標設定・目的達成を前提とした議論の外部、すなわち「移行期正義プログラムの意図せざる結果」や「同プログラムの設定する目標とは異なる社会的効果」に対する考察は欠落してきた。世界各地のケースを報告し、それが当初の目標に照らし合わせてどの程度・どのように評価できるか、不十分であった部分の要因は何か、といったことが研究のフレームワークとなる傾向がある、ということである。しかし、そこからは移行期正義プログラムが常に「失敗であった」と評価されがちな実態をすくいとる視点は出てこない。本研究では上記の社会学的なアプローチを採用した分析視点を発展させ、その成果を国際学会（10月）で報告し、そこでの質疑を反映させた論文を執筆する。

個人研究

保育者の悩み・学習ニーズの変容と同僚性を基礎とした研修に関する実証的研究

研究代表者・任期制助教　黒澤 祐介
（社会福祉学）

保育者の研修および専門性獲得過程の実証的な研究

は、ある時点での悩み・ニーズの調査に留まっており、継続的、追跡的な研究は少ない。また、保育の研修に同僚性が重視されているが、学校教育分野で一定の理論的な蓄積あるものの、保育に対応した同僚性の検討はまだ端緒である。

そこで、本研究では、保育者の悩み、学習ニーズがどのように変容していくのか、また、どのような保育者を取り巻く環境要因が影響を与えているのかを、2年にわたるアンケートによる追跡調査によって、実証的に解明していく。アンケート結果と、保育における新しい協働の同僚性の理論的検討をふまえ、特に「気になる子」の保育について、新しい協働的な同僚性を基礎としたカンファレンス型の研修をモデル的に実施し、その効果評価を行う。

これまでの保育者の研修に関する研究においては、保育者の専門性向上のためには「省察」が必要なことや、同僚性基礎とした「語り合い」が必要なことなどが述べられている。これは、保育者が省察的実践家であり、今、目の前にいる子どもの姿と自分の保育実践の省察の中から学習・研修ニーズを発見していく必要性を示している。

しかしながら、保育者が専門性を獲得していく過程において、悩みや学習のニーズの変容に一定のモデルや法則性がありえないとも考えられない。加えて、保育者がどのような悩みやニーズを持つかに関しては、単に経験年数だけでなく、保育者個々がおかれている園の方針や環境、体制、職員同士の関係も当然深くかかわってきていることが予想される。例えば、それぞれの園内外おけるサポート体制や園内での職員関係、担当学年や、園を構成する集団の諸要件などが考えられる。先行研究においては組織・人間関係の良好度が保育者のモチベーションやメンタルヘルスと強く関連していることも明らかにされている。

そこで本研究では、保育者の専門性形成過程において、悩み、学習ニーズがどのように変容していくのか、また、どのような保育者を取り巻く環境要因が影響を与えているのかを、2年にわたるアンケートによる追跡調査によって、実証的に解明していくことを第一の目的とする。

また、アンケート調査で保育者の悩み・研修ニーズを明らかにし、また、保育における新しい協働の同僚性の理論的検討をふまえ、特に「気になる子」の保育について、個々の保育者のニーズに添うテーマ設定を行った上で、新しい協働的な同僚性を基礎としたカンファレンス型の研修をモデル的に実施し、その効果について、質的および量的に調査を行う。

個人研究

「民族学校」の日韓比較研究 —日本の「朝鮮学校」と韓国の「華僑学校」を中心に—

研究代表者・任期制助教　宋　基燦
（社会人類学）

近代国民国家の成立以降、学校教育は国民を再生産していく「国家的装置」として機能してきた。日本の場合、1941年から敗戦まで続いた「国民学校」から国家主義的学校教育のある典型を確認できるが、占領時の改革により始まった戦後義務教育体系の中でも、学校教育の「国民」への統合機能は強調されてきた。一方、日本による植民地支配の中で近代的教育制度が移植された韓国の場合、帝国日本の法律によって設置された「国民学校」が解放後にも存続され、1995年まで続いたことはとても興味深い現象である。

これは植民地支配に対する対抗的民族主義の慣性と朝鮮戦争の影響によって味方と敵の区別に執着する歪んだ国家主義にその原因がある。民主化以降、韓国では民族主義と反共主義に偏った教育環境への自省から「国民学校」を廃止し、「初等学校」に名称を変える改革が行われたが、日本と同様、学校教育における「単一民族神話」に基づいた民族主義言説の影響力は、依然強いものがある。このように学校教育全般において民族主義的言説と「国民」への統合が強調されている日本と韓国の教育環境のなかで、日本には「朝鮮学校」、韓国には「華僑学校」といった比較的歴史の長い「外国人学校」が、それぞれ分離主義的教育空間を維持してきたことは、日韓両国におけるナショナリズムとレイシズム、民族関係の諸現象を理解する上でとても重要な現場となる。

そこでこの研究は、日本の「朝鮮学校」と韓国の「華僑学校」への人類学的現場研究を通じて、各々の学校の現状とその教育のもつ意味を実証的に把握し、それを比較することによって、異質な民族集団に対する日本と、かつて日本の植民地だった韓国両国のナショナリズム言説と実践における連続性と差異を実証的に確認することを目的とする。なお、この研究によって得られる理解は、主に日本の外国人学校関連政策の立案や実践のみならず、多文化共生への哲学と取り組みに

おける解釈と実践の新しい地平を提示できるものと期待される。

この研究の目標は日本の朝鮮学校と韓国の華僑学校への実証的比較研究を通じて、両国における「外国人学校」の現状を把握し、両国におけるナショナリズム言説を比較・分析することにある。この研究目的を達成するために、本研究は学校現場、学校を媒介にしたコミュニティへの人類学的現場研究を行う予定である。具体的調査手法としては、参与観察、インタビュー調査などが予定されている。また参与観察にはできるだけ多くの映像資料を確保、本研究の結果分析と次なる研究のための映像アーカイブを構築する予定である。

個人研究

触法知的障害者の更生と地域生活定着を促進するピアサポートプログラムの開発と評価

研究代表者・教授　脇中　洋
（発達心理学・法心理学）

本研究では、知的障害が疑われる受刑者（触法知的障害者）の矯正施設出所後に地域生活定着が促進されることを目的とした更生プログラムの一環として、ピアサポートプログラムを出所前後にわたって行う。そのことによって、プログラム内容を練成しながら評価を行う実践的研究である。

刑務所におけるこれまでの処遇は懲罰的な意味合いの強い受刑作業を中心としてきたため、具体的な更生プログラムについては欧米諸国で行われてきた認知行動療法を中心とする再犯防止のための心理教育を試行的に導入し始めている段階である（刑事立法研究会2005）。ところが認知行動療法は当事者の知的機能を前提として行動変容を図るものであり、受刑者の理解能力を越えて心理教育を行うことに困難さを抱えている。

そもそも知的障害のある受刑者は社会的に弱い立場にあるため、被害体験を持つ者が少なくなく、自尊感情に乏しい者が多い（内田他2011）。彼らの更生の過程において不可欠なプロセスとして、自らの経歴を振り返り最低限の自己肯定感を取り戻すことも含まれるであろう。こうして過去を振り返り新たに生き直す矜持がなければ、自らの加害経験を見つめて反省悔悟し、被害者に対して慰謝の念を抱くことも難しいと思われる。こうした背景および課題のもとに、本研究では触法知的障害者の真の更生過程の一環としてピアサポート活動を構想し、その社会的実装を目指すものである。

ピアサポート活動の利点として、同じ問題を抱えている当事者同士が説明を要することなく理解し合えることや、ピアサポーターが先行して具体的に活動している生きたモデルとなるために社会復帰プロセスにおける現実的な目標になること、ピアサポーターは自分が世話を受けるだけの存在ではなく社会的役割を担って他者の役に立てるという喜びを抱くことができ、主体的に生きる意欲を取り戻せること、こうした活動で役割を得て責任を担う経験が就労訓練のステップの一つになること等があげられる。

なおこれまでの高次脳機能障害者を対象としたピアサポート実践（中塚・脇中2007）で明らかになった重要な点は、社会の側に過剰に適応することを求めるのではなく自己認識を高めて適切な自己主張を図ること、ピアサポーターが相談に乗るばかりでなく可能な範囲で「活動をともにする」点に有効性があること、ピアサポーターの残存機能が必ずしも高くなくても当事者を尊重する構えを持てばその機能と責任を果たせること、ピアサポーター養成を含めて組織的で長期にわたる支援体制を構築することがあげられる。

もちろんピアサポート活動はそれ自体で完結したプログラムではなく、他の受刑活動や生活支援と連動することによってその効果を発揮する。そこで矯正施設のみならず地域生活定着支援センター、更生保護施設、救護施設、グループホーム、障害者福祉施設の職員を含めた組織間連携状況の調査研究が必要となる。

2012年度は矯正施設出所後の社会内処遇の動向を把握するために、カナダ・ヴィクトリアのハーフウェイハウスを調査したほか、国内でも地域生活定着支援センターや救護施設、社会福祉施設の調査を行った。また社会復帰促進センターの特化ユニット（知的障害者専門の工場）のクラウニング講座における受刑者の変化を観察した。さらに社会復帰促進センターでは、教育統括担当の刑務官と共同研究に向けた協議を行い、矯正プログラムの一環としてのクラウニング講座の評価を行う方向で調整を行うことができた。

そこで2013年度は、クラウニング講座における知的障害受刑者を縦断的に調査して、自己肯定感、自己効力感の変容を調べるほか、引き続きヴィクトリアの仮出所者の聞き取り調査を重ねる予定である。これらの活動を通じて、触法知的障害者の更生状況の評価ととも

に矯正施設や出所後の福祉施設職員を対象とした組織論的な連携も評価対象とし、個人の発達臨床的かつ能力論的な変容だけでなく、領域横断的な調査及び評価を行う。

文献

独立行政法人・国立重度知的障害者総合施設のぞみの園（2010）『平成21年度障害者自立支援調査研究プロジェクト「福祉の支援を必要とする矯正施設等を退所した障害者等の地域生活移行のための効果的な支援プログラムの開発に関する研究」報告書』

独立行政法人・国立重度知的障害者総合施設のぞみの園（2011）『平成22年度障害者総合福祉推進事業「福祉の支援を必要とする矯正施設等を退所した知的障害者等の地域生活移行を支援する職員のための研修プログラム開発に関する調査研究」報告書』

刑事立法研究会（2005）『刑務所改革のゆくえ　監獄法改正をめぐって』現代人文社

中塚圭子・脇中　洋（2007）「高次脳機能障害者が社会へつながるために」福祉と人間科学18. pp.71-93.

日本犯罪社会学会（2009）『犯罪からの社会復帰とソーシャル・インクルージョン』現代人文社

内田扶喜子・谷村慎介・原田和明・水藤昌彦（2011）『罪を犯した知的障がいのある人の弁護と支援　司法と福祉の協働実践』現代人文社

個人研究

バガヴァティー・アーラーダナーの新校訂本作成と全訳によるジャイナ教の断食死研究

研究代表者・任期制助教　河﨑　豊
（インド学・仏教学）

ジャイナ教修道論の大きな特徴の一つとして、修行の最終段階で断食死を選択することを理想とする点を指摘できる。このような理想に根差す死生観は、宗教学的、文化史的、また死生学的観点から見ても注目されよう。これまで、僅かながらジャイナ教における断食死に関する研究は行なわれてきたが、断食死の実態を検討する際に不可欠な筈の、古典語で書かれた各種一次資料の批判的校訂本や現代語による翻訳が殆ど存在しないため、研究の進展は極めて芳しくない。

本研究が扱う、シヴァーリヤ（１～２世紀）作『バガヴァティー・アーラーダナー』（以下、BhA）もその例に漏れず、本文献の全体が現代の学問的水準に照らし批判的に校訂され現代語訳されたことがなく、従ってBhAに関する研究も数えるほどしか存在しない。

しかし、BhAは断食死の次第を扱うものとしては現存最古の文献かつ、その後数多く作成された断食死マニュアルのモデルとなったものであり、当該の問題を検討する際の最重要資料である。更に、記述言語が言語学的に不明点の多いジャイナ・シャウラセーニー語であること、内容が断食死の実践手順にとどまらず、当時の俗信に至るまで種々雑多なテーマを含むことなど、単にジャイナ教の断食死研究という側面だけでなく、文化史研究、言語学研究の点でも重要な資料を提供する。

以上を踏まえ、本研究は①古写本に基づく新たなBhAの校訂②新校訂本に基づく現代語訳の作成③以上２点を行なう上で付随する、個別的な内容の検討、を課題とする。

前年度はBhA研究の予備的な作業として、代表者が作成した暫定的なBhA校訂本と下訳に基づいて定期的に研究会を開催し、また現存BhA写本の所在調査を行なった。

本年度も引き続き研究会を継続的に開催して校訂作業を継続すると同時に、インド国内の図書館で写本を入手し、またこれまでの研究経過については、今年度中に複数の学会で報告する予定である。

個人研究

タイ国を中心とする東南アジア撰述仏教説話写本の研究

研究代表者・本学非常勤講師　清水 洋平
（仏教学・南伝仏教）

東南アジア大陸部の上座仏教圏には、土着の文化とハイブリッド化し、独自の発展を遂げた仏典が多く存在する。しかし、このような東南アジア撰述の仏典の多くは、現在、貝葉や折本紙による写本のまま、一部寺院の経蔵に無差別に保管されているものも多く、所在やその内容は不詳のものが多い。また、所蔵環境も良くないことから隠滅の危機に瀕している。このよう

な状況を危惧し、研究者並びに研究機関がその調査・収集、或いはカタログの作成に努力している。

このような現状を踏まえての本研究は、タイ国を中心に従来より同地に継承されたクメール文字で記された貝葉写本を中心に、同国に流布する東南アジア独自撰述の仏教説話写本を調査・収集し、その網羅的な研究を目指すものである。先ずタイ国中部地域の寺院が所蔵する貝葉写本の所在目録を作成し（ほぼ完了）、個々の文献の一次資料としての資質を検証し、併せて既出の所在目録との横断的な整理を行う。そのことを通じて、東南アジア撰述仏教説話写本研究の基礎となる一次資料所在目録及びデータベースの構築とその公表を目的とする。以降、個別写本研究に進み、特に東南アジアの積徳行について文献学的な裏づけに基づく仏教学の立場からの研究に歩を進める。

本研究は、従前の科研プロジェクト「タイ国中部地域の王室寺院が所蔵する東南アジア撰述仏教説話写本の研究」（研究活動スタート支援 22820077）を承け、その研究課題の中で作成した同地域の寺院が所蔵する貝葉写本の文献タイトルのみを記した所在目録を改善し、国内外の研究者、研究機関の要望に的確に応え得る新たな所在目録・データベースの構築を先ず行うため、本年度は、次の計画で研究を進める予定である。

(1)タイ国中部地域の王室寺院が所蔵する貝葉写本の所在目録の作成を通じて、浮かび上がってきた個々の文献の写本資料としての資質を整理する。（例：同一タイトルの文献であってもその内容分量に異なりがあり、同一文献に複数のヴァージョンがある可能性がある。よって、十分な区分けが必要である。）

(2)現在までの調査で収集してきた東南アジア撰述仏教説話文献を中心とした約４万枚近くのデジタル画像資料を所在目録に反映させる。

(3)文献ごとの様々な既出の所在目録との横断的な整理を行う。（フランス極東学院名誉講師Jacqueline Filliozat女史が作成、公表されている東南アジアの仏典写本に関わる所在目録、並びにP. Skilling and Santi Pakdeekham, *Pāli Literature Transmitted in Central Siam*, FPL Bangkok, 2002.に代表されるMaterials for the Study of the Tripiṭakaシリーズのものに記されている情報との統合・整理が中心である。）

これら一連の作業から構築した所在目録・データベースを基にして、現在まで殆ど実態が不明であったタイ国中部地域の王室寺院が所蔵する収蔵文献の全体像、並びにその特徴を明らかにする。

個人研究

後期田辺哲学における象徴概念の研究

研究代表者・本学非常勤講師　竹花 洋佑
（哲学・日本哲学）

本研究の目的は、田辺元の象徴概念の理解を通して彼の後期哲学の意味と可能性とを明らかにすることである。本研究は次の三つの課題から構成されている。(1)田辺の象徴概念の基本的意味とその思想史的背景とを明らかにすること。(2)後期の田辺哲学の中での象徴の意味と位置とを、彼の宗教哲学ないしは共同体論の核心的概念である「実存協同」との関わりにおいて解明すること。(3)『ヴァレリィの藝術哲学』および『マラルメ覚書』の中で田辺が論じる象徴詩の問題との関係で田辺の象徴概念の具体的な意味と可能性とを明らかにすること。

第一に、象徴概念の基本的意味を明らかにしておくことが研究の前提として必要とされる。まず田辺が象徴概念を提起する際の背景を発展史的および思想史的なアプローチから明らかにすることが求められる。象徴概念は後期哲学の出発点となった『懺悔道としての哲学』において重要な位置を占めるものであるが、しかしそれはかなり唐突な仕方で語られるものである。したがって、象徴概念の基本的な意味を理解するためには、田辺のそれまで思索の展開において象徴ということが論じられる必然性がどのようにして生じてきたのか、さらにそうした必然性が生まれる契機となった思想史的背景はどのようなものであったかを理解する必要がある。

第二に、象徴と種という二つの概念の関連性を捉えることが求められる。すでに述べたように両者は共に否定的媒介性という意味を担う概念であり、象徴の基本的意味を捉えるためには、その否定的媒介性の内実が種とどのような共通性と相違性をもつのかが具体的に見定められなくてはならない。

第二の課題は、後期の田辺哲学の中での象徴概念が有する意味と位置とを、彼の宗教哲学ないしは共同体論の核心的概念である「実存協同」との関わりにおいて解明することである。象徴と種との関連性を捉えるにあたって留意されなければならないのは、否定的媒

介性を担うものは種から象徴へと移行するにもかかわらず、後期においても種という概念は放棄されているわけではないという点である。後期における種と象徴との並存という問題を捉えるためには、媒介性という論理的なアプローチ以外の視点が求められる。すなわち、その視点が種も象徴も共に田辺の共同性の概念に関わりをもつことに注目するというものである。

最後に田辺が論じる象徴詩ないしは象徴主義との関係で象徴概念の具体的な意味を明らかにしていく。そのためにはまず田辺がヴァレリーやマラルメの象徴詩をどのように理解しているかを明らかにすることが必要となる。田辺の象徴詩の解釈の内実を、田辺が批判的に対決している解釈やそれ以外の現在の主な解釈との関係で明らかにした上で、象徴概念の哲学的意味の解明を行なっていく。具体的には、死や偶然性の問題において顕わとなる人間の個体性と「実存協同」として語られる個体の共同性とが結びつく地点としてその意味を捉えることを目指していくことにする。

個人研究

グローバル化時代における「人権」概念とセクシュアル・マイノリティの包摂

研究代表者・任期制講師　赤枝 香奈子
（社会学）

【研究目的】

本研究は、近代において社会の周縁に位置づけられてきたセクシュアル・マイノリティが、現在のグローバル化する社会の中でその「人権」を認められ、社会に包摂されつつある現状に注目し、それがいかなる歴史的変遷を経てのことであるのか、そこで使われる「人権」概念を再検討しつつ、セクシュアル・マイノリティの可視化と承認のプロセスを明らかにすることを目的とする。その際、セクシュアル・マイノリティの中でも特に不可視とされているレズビアンについて、日本とフィンランドという、女性同性愛に対する異なる抑圧形態をもった二つの国を比較し、彼女たちに対する差別や偏見、不可視化の圧力と、それに抗する対抗的生き方やネットワーク形成のあり方について検証する。

近代において同性愛者やトランスジェンダーなど、セクシュアル・マイノリティと呼ばれる人々は、まさにマイノリティ（少数者）として、異性愛者とは異質な存在とみなされ、社会の周縁に位置づけられてきた。しかしグローバル化の進展の中で彼／彼女らの「人権」が認められ、また同性婚など彼／彼女らが取り結ぶ関係が、従来の家族を超える新たな親密な関係として認知されつつある。しかしそれは当のセクシュアル・マイノリティたちによって諸手をあげて賛同されているわけではない。そこでは、セクシュアル・マイノリティは異性愛者同様の「よき市民になること」を要請され、異性愛者と同化することが暗黙のうちに求められているからである。

このようなセクシュアル・マイノリティの生き方や承認のあり方をめぐる議論が、同性婚の是非をめぐる鋭い対立を生み出しているアメリカに対し、世界でいち早く同性間パートナーシップ制度を導入し、現在では同性婚を認める国々もある北欧では、そのような新たな親密性が将来の可能性として議論される段階を過ぎ、実際に「生きられる」ものになっている。しかし、これらの国々で同性愛者に対する差別や偏見、嫌悪・恐怖感情（ホモフォビア）が完全になくなったわけではない。また、男性同性愛者に比べ、女性同性愛者（レズビアン）は依然として不可視化され、「いない」とされていることも指摘されている。

同性愛者の承認は、社会のホモフォビアに対抗する中で要請されてきたが、その際、「人権」が重要なキーワードとなってきた。「人権」は近代西洋中心的概念として批判されてきたが、社会的弱者の権利を求める際、依然として有効な概念であることもまた事実である。しかし日本の場合、ホモフォビアに抗する対抗的言説において「人権」が有効なキーワードとはなってこなかった側面がある。そのことが、セクシュアル・マイノリティの社会的包摂とどうかかわっているのか、フィンランドの事例と比較しつつ、日本のホモフォビアの形成とセクシュアル・マイノリティ承認のプロセスについて明らかにする。

個人研究

共感覚の進化的基盤を探る

研究代表者　任期制講師　高橋　真
（比較認知科学）

共感覚とは、ある刺激に対して通常の感覚（e.g.視覚）だけでなく、別の感覚（e.g.聴覚）が生じる知覚現象である。「音を味わう」や「数字に色がついて見える」などの特殊な知覚経験が共感覚症として知られている（Ramachandran, 2003）が、共感覚的な知覚はより一般的にみられる知覚経験でもある。例えば、「黄色い声」や「高音・低音」、「明るい声・暗い声」といった比喩表現である。このような共感覚が存在する理由を明確にするには、共感覚の進化的過程を探り、共感覚が生じた時の選択圧を知る必要がある。そのため、ヒト以外の動物との比較研究が重要となる。

ヒト以外の動物の共感覚では、Ludwig, Adachi, & Matsuzawa(2011）は、チンパンジーがヒトと同じような音と光の明暗に関する共感覚的な知覚をすることを示している。さらに、視覚的ノイズと聴覚的ノイズの間の共感覚的な知覚をラット（高橋・谷内・藤田, 2010）やハムスター（高橋・別役・玉井・谷内・藤田, 2011）が行っている可能性も選好滞在法を用いて示されている。しかし、同じ手法でも「明るい音」や「高い音」のような共感覚的知覚がラットでは生じていない（高橋, 2013)。

これらの研究から、共感覚が成立する刺激の組み合わせが種によって異なる可能性が示される。このことから、共感覚の進化過程はいくつかの段階を経て成立すると考えられる。例えば、水中においては音の伝達による波によって視覚像も同様の変化が生じるため、視聴覚のノイズのような情報伝達特性に直観的な類似性のある共感覚は魚類の時点で進化したと考えることができる。その一方で、「高い音」のような組み合わせは間接的であるため、ヒト言語のような象徴的な認知機能を獲得することで成立すると考えることができる。

こうした可能性を検証するためには、水中で生活する種、陸上で生活するが象徴的なコミュニケーションを行わない種、および、ヒトのような象徴的コミュニケーションを行う種でそれぞれの特性に従った共感覚が生じているかどうかを調べる必要がある。そこで、本研究では、魚類のキンギョ、ネズミ目のラット、および、ヒトの共感覚を調べることで、その進化的起源を探る。

引用文献

Ludwig, V. U., Adachi, I., & Matsuzawa, T. 2011. Visuoauditory mappings between high luminance and high pitch are shared by chimpanzees (*Pan troglodytes*) and humans. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 108, 20661-20665.

Ramachandran, V. S. 2003. The phenomenology of synaesthesia. *Journal of consciousness studies, 10*, 49-57.

高橋真　2013　ラットにおけるクロスモーダル知覚の検討『大谷大学真宗総合研究所紀要』, 30巻, p125-140.

高橋真・谷内通・藤田和生　2010　ラットはクロスモーダル知覚をするか？『動物心理学研究』, 60巻, p187.

高橋真・別役透・玉井智之・谷内通・藤田和生　2011　ハムスターはクロスモーダル知覚をするか？『動物心理学研究』, 61巻, p213.

個人研究

日本泳法　神統流の伝承と史的実相に関する調査研究

研究代表者・教授　中森 一郎
（体育学）

日本泳法は、我が国の地域に根ざしたおよぎの伝承文化であり、現在12流派が伝承活動をおこなっています。今回の課題“神統流”もこの中の一流派で、今日、鹿児島市において伝承されています。神統流において伝えられている歴史では、鹿児島の黒田家８代の頼宗が明応２年（1493）に水芸を編み出し、10代頼定がその水芸を成就させ、大永５年（1525）には『大永文書』を記し、天文２年（1533）に『神統流道本之巻』を著したとあります。神統流は、この黒田頼定を流祖初代宗家として、始まった事としています。現在、日本泳法の世界の中では、この伝えられてきた歴史に従って、神統流が最も古い歴史を有するとされています。また、現

在伝承されている神統流泳法は、同流第16代宗家黒田清光が昭和10年（1935）刊行の『薩州伝来　潮手繰方神統流梗概』（系統游泳協会発行）に示した「神統流現代潮手繰方（神統流現代游泳之義）」を根幹として伝えられてきたと考えられるものですが、伝書及び泳法に関する用語が独自で難解な表現であることも特色の一つとされています。この神統流の伝承に関する具体的な研究・調査は、平成２年度～平成４年度に科学研究費補助金を得て実施した中森一郎（研究代表者）と岩下聆による共同調査研究と平成８年度に大谷大学真宗総合研究所一般研究（個人研究）の補助金を得て実施した中森一郎（研究代表者）の神統流泳法の解明調査がありますが、今日までは他の調査研究が見あたりません。今回の研究調査は、前述２件の研究調査においての未調査部分（明治以前）と未解明のままの伝書及び泳法おける用語を中心に調査研究を進めることを予定しています。具体的には、ａ．史的調査：黒田家の系譜の検証（近江・薩摩・福岡・播磨など）、神統流宗家の道統、歴代黒田家の経歴、明治・大正期の黒田家、黒田清光による神統流復興の再検証、黒田清光没後以降の神統流など　ｂ．泳法と伝承に関する調査：伝書に見る神統流、黒田清光による神統流現在潮手繰方、泳法用語の伝承状況と解釈、神統流泳法の現在解説、現在の神統流泳者の確認など　ｃ．神統流保存資料の調査・保存：黒田家保存分、神統流関係者保存分など確認と目録化　ｄ．神統流泳法の映像保存：水上・水中同時撮影による映像保存、写真保存などの実施計画としています。これらから、神統流の史的な全体像に対する再検証、伝書や泳法の用語の解析、泳法の映像としての保存、関係資料の保存などができればと考えています。

個人研究

摂食抑制及び食べ過ぎに関する認知的研究

研究代表者・准教授　田中 久美子
（社会心理学・教育心理学）

本研究は、食刺激への接触や、自己制御に伴う資源消耗による影響を受けやすい摂食抑制（restrained eating）を認知的観点からとらえ、その失敗となる食べ過ぎに至る心的過程を解明するための基礎的研究である。

従来の摂食抑制研究では、行動抑制（食べないこと）の成否が焦点となり、思考抑制（食べ物について考えないこと）による影響はほとんど扱われてこなかった。思考抑制は、制御資源の消費が大きいだけでなく、抑制の反動で、意図に反した思考が生じ、更に抑制意図が強められ、思考の増加を生むという「思考リバウンド」（Wegner, 1994）が起きやすい。

以上のことから本研究では、これまで曖昧であった摂食抑制の対象（行動または思考）を明確に区別し、思考抑制を操作することで、制御資源の消費及び思考リバウンドへの影響を検討する。そのため、後述する２つの研究の実施を計画している。対象はいずれも女子大学生とし、本学施設内にて個別ないし小集団での実験を行う。

（研究１）摂食抑制に伴う思考制御の基礎データを得ることを目的とする。「食べ物について考えない」とは、具体的に食べ物の何を考えないことなのか。研究２の思考抑制で、明確に抑制内容を指示するための予備研究である。摂食抑制者が持つ、食に対する２つの矛盾する目標「食べる楽しみ」と「ダイエット」（The Goal Conflict Model of Eating; Stroebe, 2002）に着目し、魅力的な食刺激（チョコレートなど）への接触に伴う思考抑制として、食べ物の風味など快楽的思考の抑制（食べる楽しみ目標抑制）、カロリーの高さや太ることへの不安の抑制（ダイエット目標抑制）、当該食刺激に関する全般的な思考抑制（曖昧抑制）、思考抑制なし（統制）の計４条件を設定する。参加者は各条件にランダムに配置され、思考抑制後、制御困難さ、思考リバウンドの程度、食刺激への魅力度などを評定する。

（研究２）計４種類の思考制御による制御資源の消費及び思考リバウンドへの影響を比較することを目的とする。魅力的な食刺激への接触により喚起しやすい「食べる楽しみ」目標に関する思考を操作する。思考抑制（抑制内容は研究１の結果を反映）のほか、積極的に考える（思考表出）、別のことを考える（代替思考）、食刺激に関する思考を生成するままに任せる（思考抑制を求めない）の計４条件を行動抑制と組み合わせて設定する。

これらの成果は、食べ過ぎに伴う肥満や摂食障害への予防的方略を示すにとどまらず、自己制御を要する他の健康行動などでも応用可能な、普遍的なものになり得ると考える。

個人研究

戦後沖縄芸術思想史論
—彫刻家・金城実の親鸞思想に関する領域横断的研究—

研究代表者・准教授　福島 栄寿
（近代日本仏教史・近代日本思想史）

本研究は、沖縄在住の反戦・平和活動家として著名な金城実（1939年～）の、彫刻家としての側面や、彼の親鸞思想に着目することで、その反戦・平和思想を問い直そうとする、新たな思想史研究の試みである。金城は、その活動において、歴史的出来事を彫刻に表現し、記憶化する営みを行ってきたことで知られるが、本研究では、彼の反戦・平和思想を、テクストの分析や、本人への聞き取りに加え、作品自体の考察を通じて検討しようとするものである。こうした戦後沖縄の親鸞思想の受容と展開に注目した本格的な歴史研究は、なされていないのが現状であるから、本研究は、戦後沖縄の親鸞思想史研究の先駆けとなるであろう。

さて、金城実は、その自宅兼アトリエ内で開催される「沖縄親鸞塾」を長く主宰しており、そこに集う人々とのネットワークを作り上げながら、日常的に親鸞思想を意識した生活を送っている。彼は、親鸞の言葉を拠り所として、反差別、反戦・平和をメッセージとする彫刻作品を作り続け、また加えて、沖縄県内外で様々に社会的活動を展開してきたのである。では、いかにして金城は、親鸞の言葉と出会い、それを自らの思想の核として練り上げ、また人的ネットワークを作り上げてきたのだろうか。本研究では、そうした金城の思想形成と、彼が関係する人的ネットワークにも注目してみたい。

こうした関心からなされる本研究は、戦後沖縄における親鸞思想の受容と展開の考察に直結するであろうし、延いては、真宗大谷派が1960年代以降に推し進めてきた真宗同朋会運動の、沖縄における受容と展開の歴史を探る上でも、重要な手がかりを与えてくれるであろう。すなわち、金城実と彼が作り上げてきた人的ネットワークを実例としながら、沖縄における真宗同朋会運動の受容と展開の歴史を解明することもまた、本研究の重要な目的である。

金城の作品は、沖縄県内のみならず、県外（長崎市、草津市、広島県、神戸市、大阪市など）に点在し、韓国国内（慶尚北道）にも存在する。彼の作品は、植民地で抑圧された韓国・朝鮮人の歴史の記憶化もまた、重要なモチーフとなっているのである。本年度は、金城への聞き取りと沖縄県内に存在する彫刻作品を中心に調査を進めるが、将来的には、金城の作品を読み解くことで、作品に込められたその思想が、沖縄の解放に止まらず、アジアへの広がりを持つことを明らかにしていきたい。金城の思想の全体像に迫ることは、現代沖縄や、アジアとの連帯の問題を思想史的に探ることでもある。

海外学会参加報告

ファンタスティック・イン・ディ・アーツ 第34回国際学会大会に参加して

一般研究（三浦班）研究代表者・准教授　三浦 誉史加

アメリカ合衆国フロリダ州オーランドにて2013年３月19日～23日に開催された学会 The 34th International Conference on the Fantastic in the Arts: Fantastic Adaptations, Transformations, and Audiences（International Association for the Fantastic in the Arts主催、於：Orlando Airport Marriott）に参加し、３月23日㈯に研究発表を行った。発表タイトルは“A Study on Children's Tales Adapted from *The Tempest* in Japan”とし、明治期から昭和期にかけて日本の少年少女向け雑誌及び図書に掲載されたシェイクスピア原作『テンペスト』改作物調査結果を報告した。『テンペスト』日本最初の和訳は1888年に出版され、書籍タイトルに「子供向け」と謳う和訳が初めて出版されたのは1926年のこと、蘆谷蘆村著『こどものシェークスピア』（警醒社）所収の改作物がそれに相当する。この二点を含め、ほとんどのテンペスト和訳は、チャールズ＆メアリー・ラム著『シェイクスピア物語』に準拠している。

ラム版では、エアリエルはいわば語り手的な役割を担っており、1888年版以降に出版されたラム訳のほとんどはそれを踏襲しているのに対し、蘆谷版では語り手としての性質を示す台詞をカットしている。また、シェイクスピア原作では、プロローグで一行の船をナポリに帰す力を持つのは、もはや魔術を行使できないプロスペローではなく、観客である。観客の協力を請うプロスペローの台詞は、虚構としての劇の性質を強く意識させる。一方、ラム版では、プロスペロー達はエアリエルに護られながら無事にミラノに到着する。ラム版は、最後まで読者を幻想の世界に留めるのである。しかし、大筋でラム版を踏襲しながら、蘆谷版は帰国にエアリエルの力を借りない。蘆谷版は、魔術の世界から人間たちを完全に断ち切っている。このように、エアリエルの扱いにおいて、蘆谷版は幾重にも幻想性を弱めていると言えよう。

蘆谷版に特徴的である幻想性の縮小が再び現れるのが、戦後数年経った少女雑誌においてである。小沢由貴・詩による「シルエット絵物語・テムペスト」（『少女ロマンス』昭和25年４月号掲載）及び、朝島靖之助・文による「テンペスト」（『少女サロン』昭和28年11月号掲載）だ。双方とも、ラム版よりミランダの描写を格段に増やしており、エアリエルの役割はより縮小している。二誌とも、ラム版における家父長制の範疇を超える可能性を示唆するミランダの台詞を割愛する一方、美しく愛らしい、夢見る少女としてのミランダ像を強調している。一方、エアリエルは魔術の起した嵐で船員を翻弄した様子をプロスペローに報告する場面すら与えられない。このミランダへの関心は、蘆谷版では一枚だけ掲載された、嵐の中のミランダとプロスペローのみ描く挿絵に表れている。時を同じくするヴィクトリア朝時代イギリスにおける絵画群では、既にミランダからエアリエルへと関心が移っていたのと対照的である。

明治政府が教育制度の近代化を促進する中で、少女達は男子教育から分離され、良妻賢母になる前のモラトリアム期を女学校で過ごすことになる。この時期は、女性の一生において特別な時期であると見做されるようにな

Orlando Airport Marriott 内の学会会場

り、少女は神秘的で繊細なものとされ、少女時代は高い価値を持つようになる。[i] 少女雑誌表紙に描かれるこうした儚げな少女像は、太平洋戦争期、銃後を支える激しい労働に耐えうるたくましい少女像への変化を経て、終戦を迎えると再び大正期の少女像へと回帰する。[ii] こうした少女像は、1950年代以降、アメリカ式生活スタイルを取り入れた強い女性のイメージへと主役を譲り渡すことになる。

蘆谷版及び『少女サロン』『少女ロマンス』版に見られるミランダの描写はそれぞれ、大正末期に継続していた特別視された少女像、及び戦後の一時的な回帰を反映していると言えるだろう。

本発表では、蘆谷版及び『少女サロン』『少女ロマンス』版におけるエアリエルとミランダの描き方は、同時代の少女時代への関心が反映され、超自然的存在であるエアリエルへのそれを凌駕したため、同作品における幻想性が縮小していることを指摘し、フロアより有意義な示唆を頂いた。

i 今田絵里香「「少年」から少年・少女へ—明治の子ども投稿雑誌『頴才新誌』におけるジェンダーの変容」『教育学研究』71 (2), 2004年, 221頁.

ii 大塚英志『少女雑誌論』, 東京書籍, 1991年, 19頁.

海外研究調査報告

中華人民共和国・大連満鉄附属施設と旅順研究調査

一般研究（李班）研究代表者・教授　李　　青

平成24年度は作家疑遅文学からみる「満洲国」時代の中国文人の心象風景に関する研究をテーマとしている。研究対象の疑遅は創作に於いてロシア文学の影響を受けている。ロシアの存在は疑遅文学及び満洲国時代の中国文人にとっては、無視できない一大要素の一つだと考えられる。東北地方に生まれ育った作家達はロシア文化との接点は如何なるものなのか、大連と旅順を調査地にし、平成25年３月23日から27日にかけて、元南満洲鉄道株式会社（以下、「満鉄」略す）と日露戦争の激戦地だった旅順を訪れた。

１．大連図書館と満鉄本部について

大連は日露戦争における日本の勝利によって、ロシアの中国東北部における権利が日本に譲渡された。新たな植民地統治を強化するために、国策会社南満洲鉄道株式会社が1906年に本社を大連にして、成立された。鉄道会社を母体にしていたが、炭鉱、製鉄所、農地などを経営しながら、様々な事業を手がけていた。特に文化事業に付属地からスタートした図書館経営に注目したいと思う。

満鉄本社は大連に設置しており、付属図書館の規模は大連が一番大きいと言えよう。当該図書館は現在大連図書館に代わり、古籍部に所蔵する「満鉄資料」として貴重な満鉄時代の各種文献が網羅されている。目録は目を通したものの、実際に目に触れたことのない資料が多い。事前にインターネット上で調べ、魯迅路分館にあると確認したが、到着した翌日に大連図書館に行くと、分館から本館への移転準備中のため、満鉄資料は梱包され、当分の間、閲覧中止だと告げられた。遙々日本から見に来た筆者にとっては、残念だった。諦めきれずに図書館に再度電話で尋ねたところでは、大部分の資料はマイクロフィルムにして、閲覧公開をしているから、もっとも多く所蔵しているのは国家図書館（北京）であると教えられた。今後は国家図書館を中心に関連資料の収集に努めたいと思う。

満鉄本部探しは少し手間取った。ガイドブックに全く載っていない。専門書に「満鉄旧址陳列館」とある建物の写真以外に住所が書いておらず、満鉄の歴史をたどると、その後に鉄道局の手に渡ったことが分かる。ところが、元満鉄本社のような看板も目印も何もなかった。似たような建物に入ってみると、「満鉄旧址陳列館」の看板が目に入り、ようやくたどり着いた。

建物は洋式の二階建てである。入り口の天井に垂らしたしゃれたシャンデリア、柱の彫刻、階段の美しい取って……往時の満鉄の栄光と植民地に施された建築の工夫が伺わせた。

建物の大部分は現在大連鉄道局に事務所としてそのまま使われている。満鉄総裁室などの一部は陳列室として公開されている。見学者はまばらで、一時間あまりの見学の間に日本人の年配者１人と私だけであった。陳列館に満鉄の歴史、満鉄社員たちが使っていた道具及び様々な遺留品が展示されていた。近くの総裁室に歴代満鉄総裁の写真と復元した総裁室があった。売店には価値のある資料はほとんどなく、日本語で書かれた大連歴史の本とか、植民地時代の古い建物の絵葉書があっただけだった。

満鉄跡地陳列館前にて

滞在中（24日）に大連科技大学の本学元留学生だった張彤准教授と交流する機会をもつことができた。張さんは自分や仲間達の研究を紹介してくれた。若手研究者の間で植民地時代の研究を盛んに行われていることを知り、今後は共同研究の路を切り開きたいと約束をした。

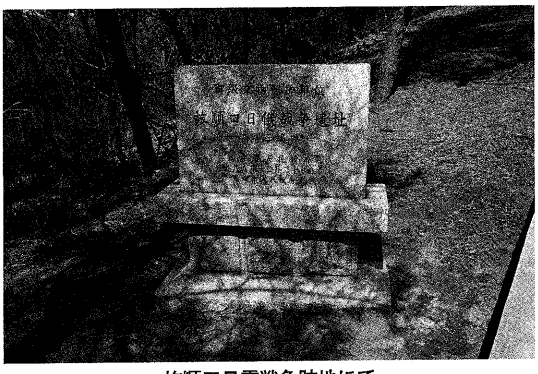
２．日露戦争跡地に訪れて

26日に日露戦争の跡地である旅順への見学に行ってきた。旅順は大連市内から40キロ離れており、旅行社が手配した車とガイドに案内してもらった。

まずは旅順口東北部に位置する東鶏冠山堡塁を訪れた。ここは帝政ロシア時代の重要な陸防御線として、塹壕は頑丈にできている。構造は昔のまま残っており、壁に日本軍に攻撃された弾痕や砲撃による部分陥没などが100年以上たった今もなお生々しく残っている。

旅順西部の203高地は最激戦地と言われており、10日間の激戦は双方が多数の死傷者を出した。勝利した日本はここに「爾霊山」という漢字が書かれた記念碑を建てた。当時に使われた大砲の複製品が置かれていた。近くに「銘記歴史　勿忘国恥（歴史を心に刻み、国恥を忘れるな）」の看板から分かるように、ここ203高地は中国の愛国教育の地でもあることが分かった。

続いてロシアと降伏調印した水師営会見所を見学してから、日露監獄旧址を案内してもらった。1902年ロシア当局が建ててから、日露戦争後に日本人が拡大工事をした。中国人、日本人、ロシア人、朝鮮人を多く逮捕し、ここに投獄した。1909年10月にハルピン駅で日本の首相—伊藤博文を暗殺した朝鮮人安重根がここに収監され、処刑された。



旅順口日露戦争跡地にて

この他に日本人居住地の跡地や旧ヤマトホテルの見学もできた。

今回の調査は、大連図書館にある満鉄資料を閲覧できなかったのは残念だが、満鉄関連の施設や日露戦争の跡地などを見学することができ、勉強になった。

今後は大連図書館の満鉄資料の開示を待って、研究を続けていきたいと思う。

国内学会参加報告

第60回日本チベット学会大会に参加して

西蔵文献研究　研究員・准教授　三宅 伸一郎
（チベット学）

2012年10月20日(土)、筑波大学にて開催された第60回日本チベット学会大会に、嘱託研究員・白館戒雲、研究員・兵藤一夫、研究員・三宅伸一郎、研究補助員・永藁知也、稲葉維摩の５名が参加した。日本チベット学会は、1953年に設立された、チベットという地域の言語・文化・宗教・社会・歴史に対する学術研究をおこなう「チベット学」という分野において、世界で最も古い学会である。年に一度開催されるその大会は、仏教学、言語学、歴史学、文化人類学等様々な学問分野の枠を越え、チベットを研究対象とする研究者が一堂に会し、それぞれの分野からの最新の研究成果を聞き・議論を交わす極めて刺激的な場である。

今年度は以下のような研究発表がおこなわれた。

- 高橋誠（早稲田大学大学院文学研究科）「カルマパ転生者と本山ツルプ寺座主の関係について」
- 手塚利彰（佛教大学歴史学部）「カンカル家文書の成立と伝来について」
- 上原周子（北海道大学大学院文学研究科）「アムド東部の多民族社会におけるチベット仏教の役割に関する一考察」
- 星　泉（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）「14世紀チベット語文献『王統明示鏡』に見られる「切り札の提示」機能をもつpa節」
- 桜井宗信（東北大学大学院文学研究科）「Bu stonの示す荼毘儀礼：Mi 'khrugs pa'i cho ga la brten nas ro'i sbyin sreg gi cho gaを中心に」
- 古角武睦（佛教大学大学院）「ツォンカパの『中観荘厳論覚書』における自立論証について」
- 西沢史仁（東京大学大学院人文社会系研究科）「チャパ・チューキセンゲの教義書」
- 赤羽律（オーストリア科学アカデミー　アジア文化・思想史研究所）「チベット仏教後伝播期に於ける二諦説：rGya dmar ba Byang chub gragsが与えた影響」

以上の研究発表題目から、近年のチベット学研究の典型的な動向を伺い知ることができる。すなわち、(1)仏教学の分野において、近年ラサにあるペルツェク・チベット文古籍研究所（dPal rtsegs bod yig dpe rnyings zhib 'jug khang）によるカダム全集（bKa' gdams gsung 'bum）の刊行により、これまで稀覯書であったカダム派文献が公開され、それらを用いた研究が盛んになっていることと、(2)文化人類学の分野での研究が盛んになっていることである。

以上の研究発表の後、チベット学の第一人者、ハーヴァード大学のLeonard van der Kuijp教授による講演“On the Recently Discovered Biography of Lha bla ma Ye shes 'od（近年発見されたララマ・イェシェーオーの伝記について）”がおこなわれた。

翌21日は、同じく筑波大学において開催された国際シンポジウム「後伝期における周辺地域からチベットへの仏教文献と思想の伝承」Transmission of Buddhist texts and thought to Tibet from neighboring countries in the period of the second diffusion (*phyi dar*) に参加した。このシンポジウムは、筑波大学の吉水千鶴子氏を研究代表者とする科学研究費助成事業基盤研究(B)「チベット仏教教学の形成過程：カシミールを中心とする周辺地域との交流の視点から」ならびに筑波大学開学40＋101周年記念事業の一環として行なわれた。そのプログラムは以下のとおりであった。

- Yoshimizu Chizuko（吉水千鶴子）, “Opening Address”
- Leonard van der Kuijp, “The Kālacakra Corpus in Tibet: Translations, Textual Problems, and Newly Recovered Tibetan Commentaries”
- Takeuchi Tsuguhito（武内紹人）, “Tibetan Language and Buddhism in Central Asia in the Tenth Century: between snga dar and phyi dar”
  Funayama Toru（船山徹）, “Descriptions of the 8th-century Kashimiri Buddhism in Chinese Sources”

- Mochizuki Kaie (望月海慧), "Some Textual Doubts in the Works of Dīpaṃkaraśrījñāna (Atiśa)"
- Pascale Hugon, "rNgog Blo ldan shes rab as a Translator and Exegete of Buddhist Epistemological Works"

国内研究調査報告

—幼稚園教諭・保育士対象のヒアリング調査—

研究代表者・教授　徳岡 博巳
（児童福祉学）

本報告は、2012年度一般研究「保育者の資質向上へ向けたリカレント・モデル・カリキュラムの開発」において、その一環として実施されたものである。

幼稚園教諭・保育士（以下、「保育者」）として働いている卒業生に対するリカレント教育のあり方はどうあるべきかという命題を元に、藤本、亀田の両名が調査研究を行なった。

藤本は「絵本の読み聞かせ」を具体例として取り上げ、現職幼稚園教諭が実際の経験を通してどのように保育技術を身に付けていくのか、それによりリカレント教育の留意点を探る試みとした。

また、亀田は「反省的実践家」あるいは「成長し続ける保育者」像を目指す上で、今後のリカレント教育のあり方、および具体的な教育内容・教育形態はどうあるべきか、その手がかりとなるものを探った。

本報告書では、両名の幼稚園教諭・保育士対象のヒアリング調査の結果を簡潔に報告したいと思う。

保育者のリカレント教育への一視点
—絵本の「読み聞かせ」を手がかりとして—

研究員・教授　藤本 芳則
（日本児童文学）

一　目的

保育者は、経験を積むことで、保育の専門家となる。経験を積むというのは、現実の子どもたちに対応する保育技術の向上とともに、保育に対する考え方、つまり保育観の輪郭が明確になっていくことである。とするなら、保育者のためのリカレント教育は、これら保育技術や保育観を向上させることが大きな目的となる。それには、新しい知識を提供するだけでは不十分であり、保育者が、みずからの保育を点検し評価する視点が必要である。このことを、「絵本の読み聞かせ」を具体例としてとりあげ、どのような点に留意してリカレント教育を構想すべきかを考察した。

二　方法

日々の保育における技術的側面は、日常的であるがゆえに、保育者が改めて意識することは、ほとんどないと思われる。保育技術は、いつの間にか身についているのである。このことは、日常的な保育行為は無意識的に行われるため、その行為が当然のこととして認識され、改めて振り返る対象になりにくい、ということを意味する。そこで、どのようなことを無意識に獲得するのかをまず把握し、自らの評価対象とすることが必要となろう。本研究では、具体的な保育場面として絵本の「読み聞かせ」をとりあげ、保育者として子どもたちと向き合う前と後で、どのような違いがみられるかを比較することで、その手がかりを得ようと試みた。

具体的には、実習を経験した本学科学生に、読み聞かせに関して２度のアンケートを実施した。その結果をふまえて、Ｏ幼稚園の協力のもと、幼稚園教諭６人にインタビューした。具体的には、６人を３人ずつ２グループにわけて語ってもらうという方法をとった。ひとりずつよりも、お互いに意見の相違がみられた場合、それぞれの理由なども聞きやすいというようなことも考慮してのことである。６人のうち、１人が教諭１年目であり、あとの５人には、ほぼ10年以上経験のあるベ

テランである。

三　結論

学生のもつ子どものイメージは、現実の子どもたちと接して得られたものではないので、当然のことながら、概念的である。一方、現場の保育者は、現実の子どもに即して保育をしている。現実の子どもに向き合うかどうかの違いは、子どもへの接し方、声のかけ方などに大きくあらわれる。読み聞かせでいえば、読むときの雰囲気づくりや読み方等々である。しかし、どちらの手で絵本を持つかとか、表紙をどのタイミングで見せるかなどのように、直接子どもとかかわらないようなところは、学生との大きな違いは見られなかった。保育者の行為や行動は、深い知見に基づくというわけではなく、絵本というメディアの特性をふまえた読み方への了解も必ずしも十分ではないようである。ここからリカレント教育では、まず専門的知識が、保育の質の向上に不可欠との認識を実感することが必要と思われる。その過程で、自らが振り返る対象としにくかったルーチンワークを評価する、という可能性がひらけてくるのではないか。一見些末と思えるような技術的側面も、絵本の読み聞かせの一部であり、それゆえに読み聞かせのもつ意味とかかわらせて考えねばならないということである。そのさい、概念的に理解するだけではなく、現実の保育に反映できるよう、実感をもって保育観をとらえなおすことが重要であり、そのための具体的方法として、適切な方法による保育者相互の情報交換や討議なども有効と思われる。

＊藤本担当の詳細は、大谷大学短期大学部『幼児教育保育科研究紀要』14号（2013. 3）に、「保育者のリカレント教育への一視点―絵本の「読み聞かせ」を手がかりとして―」として掲載。

「成長し続ける」保育者であるために
―現職保育者へのヒアリングから―

研究員・講師　亀田 十未代
（保育学）

一　目的

「反省的実践者」あるいは「成長し続ける保育者」像を目指す上で、今後のリカレント教育のあり方、および具体的な教育内容・教育形態等を探っていく。今回はアンケート調査およびヒアリング調査を通して、現場の保育者のニーズを探り、リカレント教育に求められている教育内容や取り組み形態等をより明確化させることを目的とする。

二　方法

①アンケート調査

ヒアリング調査をするにあたって、大谷短期大学卒業生（４年経験11名、２年経験７名）にアンケート「保育者の専門性（保育力）について」を実施。

②ヒアリング調査

ベテラン保育者Ｅ氏（元・大谷大学短期大学部講師　現在・佛教大学特任教授）とアンケートに答えた現役の保育者から２名（大谷大学短期大学部卒業生・経験４年）に集まっていただき、対談形式でヒアリングを行った。

＊現役の保育者２名からは、事前にお願いしていたアンケートに基づいて語っていただきながら、「今どんなことを学びたいか」「どのような学びの場を望むか」を具体的に話していただいた。また、ベテラン保育者Ｅ氏からは、若い保育者の話を聞き、自分の経験を振り返っていただきながら、「自ら学び続ける力」を育むために何が必要かを語っていただいた。

以上、話し合いの記録を今後の研究の資料として役立てていくものとする。

三　結果

アンケート調査およびヒアリング調査での主な質問項目と回答内容は次のようである。回答内容については、予想通り様々な内容が含まれており、とても一つにまとめられるものではないが、敢えて整理のため次のようにまとめた。

①目指している保育者像について

・子どもに寄り添い、子どもの心を理解し、笑顔の

似合う元気な保育者
・一緒に遊び、子どもの意欲や笑顔を引き出し、子どもと共に成長できる保育者
・子どもにも保護者にも信頼される保育者

②どんなことに悩んだか、立ち直るきっかけは何であったか、また保育者として続けられたエネルギーは？
・保護者や職場での人間関係（９名）
・保育技術や保育力（８名）
・自分の能力や人間性（４名）
・子どもとの関係（３名）

＊立ち直ったきっかけ&保育者として続けられたエネルギーは
・子どもの笑顔や成長、そして信頼関係
・保護者との和解や感謝の言葉
・同僚、先輩、幼教の友人に悩みを話したり、共感してもらったこと

③保育者としてもっと力をつけたいこと（保育者の専門性）は何か
・一人ひとりを理解するための知識（健康や発達、障害児保育等々）
・子どもがワクワク出来るような遊びや生活を創り出す力（想像力、創造力、保育技術と感性、チャレンジ精神等）
・目的に向かって、仲間と力を合わせ達成できる力（計画力、実行力、判断力、コミュニケーション力等）

以上の回答を振り返ってみると、保育者達がいかに子ども一人ひとりを大切にしながら、豊かで充実した保育を展開していきたいと考えているかがわかる。その目的のために保育者自身が上記（結果の③）にあげられたような豊かな人間力を求めていることがわかった。また、（結果の②）からは、学びたい意欲を継続させる力は、子ども、保護者、保育者同士、あるいはそれ以外の豊かな人間関係であることが伺える。

卒業生２名とベテラン保育者を招いてのヒアリング

このことから、リカレント教育は、保育者としての専門的知識を学んだり、豊かな人間性を育む機会を“継続的に”持つことが求められており、またそれをどのように学ぶかも重要になってくると考える。ヒアリングでは、講座形式の受身的な学び方だけではなく、自分達の実践を報告し、語り深めあい、人間力を高め合える研究会のような場を作れないかという案も出された。そこに養成校の教員が参加すれば、実践を深め理論化に結び付けるなど、共に豊かな保育を創造する場になることも考えられる。しかしながら、これは一つの案にすぎないので、具体的な方法等については、今後、チームとして研究を深めていきたいと考える。

共同研究及び公開研究会報告

国際仏教研究「第4回公開講演会」
世界的仏教学者、シュミットハウゼン教授による講演
講題：「アーラヤ識の起源に関するいくつかの見解」

国際仏教研究　研究代表者・准教授　井上 尚実

11月23日㈮大谷大学響流館メディア・ホールにハンブルグ大学名誉教授ランベルト・シュミットハウゼン先生をお迎えし、「アーラヤ識の起源に関するいくつかの見解」(Some Remarks on the Origin of Ālayavijñāna) という講題のもと、真宗総合研究所国際仏教研究班の2012年度第4回公開講演会が開催された。国際的に著名な唯識思想研究の大家による講演とあって、100名近い聴衆が集まり、英語による学術的な発表に熱心に耳を傾けた。

シュミットハウゼン教授は瑜伽行唯識思想研究の大家で、1987年に出版された『アーラヤ識：瑜伽行思想の中心概念の起源および初期の発展』(*Ālayavijñāna: On the Origin and Early Development of a Central Concept of Yogācāra Philosophy.* Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies) は、唯識思想研究史に聳えたつ記念碑的業績として、四半世紀たった現在も高く評価されている。さらに1990年代以降は、仏教と自然、環境倫理の問題をテーマとした著作によっても国際的に注目されている。1999年からは英文仏教雑誌『イースタン・ブディスト』の編集顧問を務めてくださり、筆者が編集実務に携わっていたときに「仏教と自然の倫理：若干の見解」(Buddhism and the Ethics of Nature—Some Remarks. *The Eastern Buddhist* 32-2 [2000], pp. 26-78) という専門的な論文を御寄稿いただいた。今回、近年の研究の方向ついてお話を伺ったところ、個人的には唯識思想の学術的な研究よりも、現代世界により広く大きな意味をもつような仏教的立場からの自然保護や環境倫理の問題に関心をもたれているとのことであった。そのような方向の活動を進めていくにあたり、一旦「アーラヤ識の起源」に関するこれまでの研究を締めくくる意味で、唯識学界における新たな学説や批判に応答する内容の著作を準備されているとのことであった。今回の公開講演は、その一部を紹介してくださったものである。

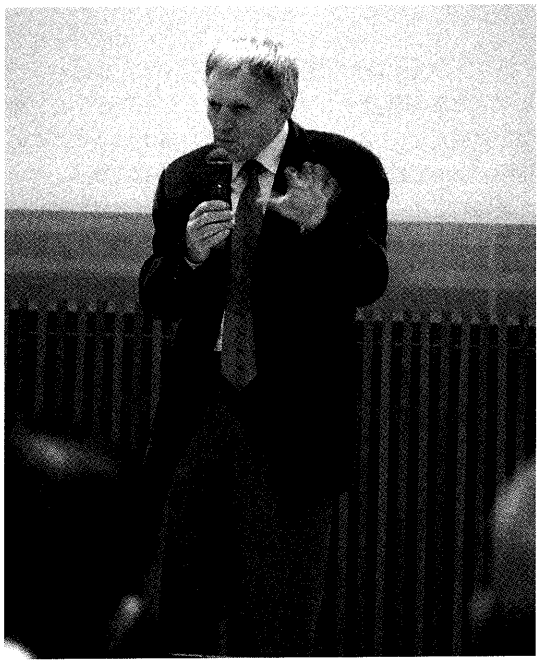
アーラヤ識の起源に関する近年の研究については、山部能宣教授が、シリーズ大乗仏教7『唯識と瑜伽行』(春秋社、2012年8月) 第6章「アーラヤ識論」の中に、シュミットハウゼン説も含めて代表的な学説を要約して紹介してくださっている。『瑜伽師地論』『解深密経』などの初期瑜伽行派文献において、「アーラヤ識」という新しい概念が出てくる最も古い文脈 (Initial Passage「端緒の一節」) を『瑜伽師地論』「三摩呬多地」に特定したシュミットハウゼン先生の仮説に対するハルトムート・ブッシャー博士の批判 (『瑜伽行唯識説の発端』Hartmut Buescher, *The Inception of Yogācāra-Vijñānavāda*, Beiträge zur Kultur- und Geistesgeschichte Asiens Series, vol. 62. Vienna: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2008) への反論が今回のお話の中心であった。ブッシャー博士の説は、アーラヤ識 (*ālayavijñāna*) は、三性 (*svabhāvatraya*) と唯識 (*vijñaptimātra*) と3つが結びついてセットになった新たな存在論的モデルとして『解深密経』において初めて説かれたとするものであるが、その3つの概念が初出においてセットになっていなければならない論理的必然性はないというのがシュミットハウゼン教授の反論のポイントであった。この問題については、ブッシャー博士の研究書に対するマリオ・ダマト博士のH-Buddhism書評 "An Archaeology of a Buddhist Doctrinal System" (H-Net Review, 2009) にも論じられている。さらに詳しい論証については、シュミットハウゼン先生が近く出版される研究書を待ちたい。

瑜伽行・唯識思想研究は、欧米の仏教学において現在最も盛んな分野の一つであり、その最先端に触れることのできる貴重な講演会であった。質疑応答では、小谷信千代教授、荒牧典俊教授、マイケル・パイ教授からの質問に対して、シュミットハウゼン教授は熱意をもって丁寧に答えられ、その学者としての誠実さに感銘を受けた。会場をビッグ・バレーに移して開かれた懇談の席には、龍谷大学の桂紹隆教授、大阪大学の榎本文雄教授、佛教大学の松田和信教授も参加してくださり、和やかな歓談のときをもつことができた。

なお、ヨーロッパ・東アジア・北アメリカの34名の研究者が論文を寄せる国際的な『瑜伽師地論』研究の学術書『瑜伽行者の基礎：仏教〈瑜伽師地論〉とそのインド・東アジア・チベットにおける適応』(*The*

Foundation for Yoga Practitioners: The Buddhist Yogācārabhūmi Treatise and Its Adaptation in India, East Asia, and Tibet. Edited by Ulrich Timme KRAGH, 2013)が、ハーヴァード・オリエンタル・シリーズ第75巻として近く発刊されることを松田教授よりメールで御教示いただいた。1429頁におよぶ大著はシュミットハウゼン教授に献げられており、その献辞と寄稿者リストに目を通すだけで、この分野の発展におけるシュミットハウゼン教授の偉大な功績を思わされる。

壇上のシュミットハウゼン教授



会場からの質問に熱心に応答される姿

(思い出深い京都での講演ということで、梶山雄一先生の奥様がデザインされた「象と孔雀の変化」柄の記念ネクタイを中心にコーディネートされたところに、シュミットハウゼン先生の細やかな配慮が感じられました)

西蔵文献研究「公開研究会」
講題：「ポン教の現状について」

講師：テンパ・ユンドゥン師（ティテン・ノルブツェ僧院長）　＊通訳：脇嶋孝彦氏

西蔵文献研究　研究員・准教授　三宅 伸一郎
（チベット学）

ポン教は、チベット宗教文化の基盤となるものとして、近年学会で注目を集めている宗教である。日本では、本学の教授を務めた寺本婉雅（1872－1940）が早くからこの宗教に注目し、1906年にこの宗教の聖典『十万白龍（*Klu 'bum dkar po*）』の翻訳を発表している。現在チベット本土では、この宗教の寺院が次々と「復興」され、活発な宗教活動をおこなっている。出版事業も盛んであり、これまでは見ることが困難であった数多くの貴重な文献が次々と出版され、僧侶や信者のみならず、研究者をもおおいに裨益している。本学図書館にも、歴代論師たちによる著作の集大成「カテン（bka'rten、「み教えに依拠するもの」という意味）」をはじめとするこの宗教の基本的文献が数多く購入・所蔵された。これにともない、本学所蔵のチベット語文献の研究を目的とする本研究班としては、この宗教に対する十分な専門知識の蓄積が急務となっている。こうした状況の中、ポン教の最高学府というべきネパールのカトマンズにあるティテン・ノルブツェ僧院の僧院長を務めているテンパ・ユンドゥン師が来日するとの報を受け、本研究班として、この宗教に対する専門知識を吸収すべく、師を招聘し、公開講演会および研究会をおこなうこととした。

公開講演会は、2012年11月26日の午後より、響流館3階マルチメディア演習室を会場としておこなわれた。内外の研究者・関係者に広報し、30名程度の参加があった。「ポン教の現状と修行法について（Da lta g. yung drung bon gyi gnas stangs dang slob gnyer gnang stangs skor）」の講題のもと、まず、開祖トンパ・シェンラプ（sTon pa gShen rab）やその故郷とされるタジク・オルモ・ルンリン（sTag gzig ' ol mo lung ring）について説明がなされ、ついで、テンパ・ナムカ（Dran pa nam mkha'）やシェンチェン・ルガ（gShen chen klu dga'）など重要な師師たち、ドゥ（Bru）・シュ（Zhu）・パ（sPa）・メウ（rMe'u）・シェン（gShen）などポン教の教義伝統を受け継いできた重要な氏族とその各氏族が築いた僧院、ニャムメー＝シェーラプ・ギェンツェン（mNyam med Shea rab rgyal mtshan, 1356-1415）によって1405年に建立されたメンリ（sMan ri）寺についてなど、この宗教の歴史が概説された。ついでポン教の教義が、以下のように「九乗」にもとづいて概説された。

1．チェシェン乗（phwa gshen theg pa）
　……占い、占星術、医学
2．ナンシェン乗（snang gshen theg pa）
　……ドー（mdos）を用いた儀礼
3．トゥルシェン乗（'phrul gshen theg pa）
　……呪術（mthu）
4．シシェン乗（srid gshen theg pa）
　……葬送儀礼（gshin chog 'dur dkar dang 'dur nag）
5．ゲニェン乗（dge bsnyen theg pa）……善行
6．タンソン乗（drang srong theg pa）……律
7．アカル乗（a dkar theg pa）……密教
8．イェシェン乗（ye gshen theg pa）……密教
9．ラメー乗（bla med theg pa）
　……ゾクチェン（rdzogs chen、ポン教の修行実践の中心となる瞑想法）

次に、1959年の動乱以降、インドとネパールでユンドゥン・ポンの教えが復興されて栄えたさまをインドに再建されたメンリ僧院と自身が僧院長を務めるティテン・ノルブツェ僧院における修行方法・カリキュラムを中心に詳しく紹介された。最後に、フランスにおいて西洋諸国におけるポン教えへの関心と実践について簡単に触れられた。

翌27日におこなわれた研究会では、前日の講演会では十分に触れられなかった、ポン教の教義に関する詳細や、ポン教の現状、とりわけ西洋諸国におけるポン教への関心の高まりについて話を伺うことができた。

非常に貴重な機会を与えてくださった講師のテンパ・ユンドゥン師および、随行の通訳者・脇嶋孝彦氏に感謝したい。

研究成果報告会

2012年度「特定研究・指定研究」研究成果報告会

真宗総合研究所主事・准教授　藤田 義孝

2013年３月８日㈮ 13：00～14：15に響流館３階マルチメディア演習室において、2012年度「特定研究・指定研究」研究成果報告会を公開で行った。草野顕之学長をはじめ、浅見直一郎所長、研究所委員会の委員、各研究班の研究員など多数の参加者があった。特定研究の１研究班、および指定研究「国際仏教研究」の英米班、ドイツ・フランス班、東アジア班の３研究班と「西蔵文献研究」の１研究班、計５つの研究班が各15分間の報告を行った。

１．特定研究

「建学の精神」教育推進研究

研究課題：大谷大学建学の精神の具現化

報告者：研究員・チーフ　木越　康　准教授

(1)　７回の研究会を開催した。

(2)　清沢満之「開校の辞」と佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」が当時の歴史的状況下で担った意義を再検証し、その現代的意義の確認と表現の問題を検討した。

(3)　学生・教職員が共に「建学の理念」を学びうる基本テキスト作成を検討中。

(4)　建学の精神と学科教育との連関を検討することが今後の課題である。

２．指定研究

「国際仏教研究」(英米班、ドイツ・フランス班、東アジア班)

研究課題：諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の整理・収集・公開

１）国際仏教研究（英米班）

報告者：研究代表者・研究員　井上尚実　准教授

(1)　佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」の英訳を完成した（研究所紀要に掲載）。

(2)　８月23日～26日にストックホルムで開催された第11回ヨーロッパ宗教学会に参加し、パネル発表を行った。

(3)　2013年10月26日～27日開催予定のエトヴェシ・ロラーンド大学（ハンガリー）との合同シンポジウムの発表準備を行った。

(4)　４回の公開講演会を開催。４回目には高名なシュミットハウゼン氏を招いての講演を実現した。

２）国際仏教研究（ドイツ・フランス班）

報告者：研究員　藤枝　真　准教授

(1)　８月31日～９月２日にデュッセルドルフで開催された第16回ヨーロッパ真宗学会に参加し、研究発表を行った。

(2)　2010年にフランス国立高等研究院で開催された共同シンポジウム「フランスと日本におけるナショナル・アイデンティティと宗教」の成果を刊行するためのフランス語原稿を完成し送付した。

３）国際仏教研究（東アジア班）

報告者：研究員　松浦 典弘　准教授

(1)　中国社会科学院歴史研究所を訪問し、研究発表を行った。

(2)　中国社会科学院歴史研究所から３名の研究者を招聘し、９月25日に公開研究会を開催した。

３．指定研究

「西蔵文献研究」

研究課題：チベット語文献およびパーリ語貝葉写本のデータベース化

「特定研究」の成果を発表する木越チーフ
於マルチメディア演習室

報告者：研究代表者・研究員　福田洋一　教授

(1) チベット語文献の電子テキスト化を進めた。ツァンナクパ『量決択註』第1章を完成し公開。
(2) 北京版チベット大蔵経の写真撮影とネット上での公開。
(3) パーリ語貝葉写本のデジタル化。
(4) 寺本婉雅の日記の翻刻。

この報告会は、2010年3月に公開で開催されて以来、4回目を迎える。将来の研究者となる大学院生や研究補助員などの参加も徐々に見られるようになり、大谷大学に学ぶ者が共同研究の活動や成果に触れて刺激を得られる場として機能し始めているように思われる。次回には、他の研究機関の研究員にも広く参加を呼びかけ、いっそう充実し開かれた報告会の実現を目指す予定である。

特別研究員研究成果報告

東南アジア大陸部におけるモン族の生業活動の歴史的動態

（2010−2012年度）特別研究員　中井 信介

はじめに

筆者は2010年度から2012年度の３年間にわたり、大谷大学真宗総合研究所に所属して、日本学術振興会特別研究員PDとしての研究活動を行った。以下は、その研究成果の報告である。

本研究では、東南アジア大陸部におけるモン（Hmong）族を対象にして、彼らの生業活動の歴史的動態とその要因を、現地調査に基づいた具体的な事例を用いて分析・考察することを目的としている。モン族は中国南部に長く暮らしてきた人々であり、中国ではミャオ族（苗族）と呼ばれてきた集団の一支系である。清の時代の漢族との度重なる衝突の後、一部のモン族の人々はしだいに南下し、ベトナム北部からラオス北部を経て、タイへは19世紀半ばに到達したとされている。またモン族はフランス人宣教師によりアルファベット表記が創出された20世紀半ばまで自らの言葉を表記する文字をもたず、いわゆる精霊信仰に基づく祖先祭祀を行いながら、焼畑での陸稲栽培やケシ栽培、そして家畜飼育と狩猟採集を生業として山地を移動してきた人々とされる。現在、タイにおけるモン族の人口は2003年に約15万人を示し、とくにタイでは北部を中心に村落を形成している。

筆者は、タイ北部ナーン県に位置するモン族の村落（以下HY村）を主要調査地として設定し、生業活動に関する現地調査を2005年から開始している。なお、現地調査での事例データの収集は、村落に住み込んで彼らと生活を共にしながら行う参与観察と聞き取りに基づいている。

研究内容

本研究では、東南アジア大陸部におけるモン族の生業活動の歴史的動態を、具体的な事例から検討するために、まずは現在の生業活動の多様性の程度を把握する必要があると考えた。そこで、一定地域内における多様性の程度を示す概念として「域内多様度」を用いて、モン族の生業活動の域内多様度を村落レベルの比較から明らかにして、その多様度が形成された過程を検討する、という試みを行っている。

なお、特別研究員としての３年間の研究では、タイ北部ナーン県に位置する全モン村落（26ケ村、HY村を含む）を事例対象として域内村落の悉皆調査を行い、村落間の生業の差異とその形成要因を明らかにすることに焦点をおいた。そして現地調査では、各村落における生業を、作物栽培・家畜飼育・狩猟採集・出稼ぎなどから多面的に把握し、これと関連した村内の各親族集団の移住履歴などを具体的に把握することに努めた。あわせてタイでの調査事例を相対化するために、ラオス北部での広域調査を行った。この広域調査は、筆者の大谷大学での特別研究員としての受け入れ教員である高井康弘教授とともに2010年８月に行った。

上記のような現地調査に基づく研究成果の主要部分については、中間報告を「生業活動の域内多様度に関する予備的考察　タイ北部ナーン県におけるモン村落の事例比較」として2012年３月の日本地理学会春季学術大会でおこなった。また、研究成果の総括的報告を、2013年８月に開催の国際会議（International Geographical Union 2013 Kyoto Regional Conference）において、Intra-regional variety of subsistence activities: A case study of Hmong hillside villages in northern Thailandと題して行う予定である。

本研究は農耕民の生業活動に関する事例研究として、東南アジア大陸部山地のモン族を対象としているが、本研究の新規性は、先にも少し述べた研究のアプローチにある。このアプローチは、同一とされる民族集団における村落レベルの生業のミクロな差異の存在を、域内村落の悉皆調査から探求して、生業の歴史的動態としての時間変化を、移住を含めて世代を重ねる過程で形成されてきたものとしてとらえて、形成された域内多様度とその形成要因を問う試みである。この試みからは、生業活動は一定地域内にどのくらいの幅をもって見出すことができるのか、そしてその幅はどのようにして形成されたのか、という生業文化の多様性に関わる考察が可能になると考えている。本研究でのモン族の事例からの検討作業は、今後も補足調査を続けながら行い、先に挙げた国際会議での議論を踏まえて雑誌論文として仕上げる予定である。

また本研究の成果として、現地調査により観察可能な現在進行中の生業活動のミクロな動態をどのように評価するかという課題については、これまでの研究蓄積を生

かしつつ、家畜飼育の事例を主に用いて下記の４本の雑誌論文（既発表）と、２本の単行本所収論文（印刷中）を執筆した。なおこの成果には、特別研究員として先行研究に関する文献資料を渉猟した成果や、タイ北部とラオス北部での広域調査から得られた村落レベルの生業の域内多様度についての知見が反映されている。

本研究に関する既発表の研究成果

雑誌論文

1 中井信介2013「タイ北部の山村における豚の小規模飼育の継続要因」地理学評論86（1）：38−50.

2 Nakai, S. 2012 Pig domestication processes: An analysis of varieties of household pig reproduction control in a hillside village in northern Thailand. *Human Ecology* 40（1）：145−152.

3 中井信介2011「タイ北部におけるモンの豚飼養の特性とその変化に関する覚え書」文化人類学76（3）：330−342.

4 中井信介2010「タイ北部の山村におけるモンのタケ利用の特性とその意思決定に関する予備的考察」BIOSTORY 13：88−99.

その他記事

5 中井信介2011「次に何を植えたらよいか」月刊みんぱく 35（8）：22−23.

6 中井信介2011「ブタと暮らす人びと　タイの山村から」季刊民族学 136：46−47.

7 Nakai, S. 2010 Historical changes in the pig husbandry system based on the natural resources of a hillside village in northern Thailand. In: Kinda, A. et al. eds. *Proceedings of 14th International Conference of Historical Geographers.* Kyoto University Press, pp. 292−293.

学会発表要旨

8 池谷和信・中井信介2012「タイにおける山地民の政策と地域社会　狩猟採集民ムラブリの事例」日本タイ学会第14回研究大会報告要旨pp. 15−16.

9 中井信介2012「生業活動の継続過程にみられる戸別レベルの多様度　タイ北部におけるモンの豚飼養の事例」日本文化人類学会第46回研究大会研究発表要旨pp. 32.

10 中井信介2012「生業活動の域内多様度に関する予備的考察　タイ北部ナーン県におけるモン村落の事例比較」日本地理学会発表要旨集2012年春季学術大会81：135.

11 中井信介2011「生業活動の継続度に関する一考察　タイ北部の山村における豚飼養の事例」日本地理学会発表要旨集2011年春季学術大会79：122.

焼畑地に作った祭壇で、供犠する鶏を左手に持ちながら畑作業の安全と豊作を祈る儀礼を行うモン族の男性（タイ北部ナーン県、2012年12月）

国立国会図書館所蔵「朝鮮筆記」の研究
—かな書き朝鮮語に着目して—

（2011−2012年度）特別研究員　許　秀美

「朝鮮筆記」は、報告者が予てよりおこなってきた新資料調査の際、2008年６月、日本国立国会図書館において発見した写本であるが、当時まだ学界に知られていない資料であった。

研究期間であった2011年８月から2013年３月までの間、「朝鮮筆記」の文献学的検討および本資料に収録されているかなで書かれた朝鮮語語彙について、ハングル表記の復元と音韻論的検討を試みた。

「朝鮮筆記」は、写本「加模西葛杜加国風説考」（日本国立国会図書館所蔵、図書請求番号［854-77］、マイクロフィルム請求記号［YD-古-6586］、一冊、写本、縦24cm、全89丁）の後ろに合綴されている。この「加模西葛杜加国風説考」には、「朝鮮筆記」のほかに、「文化元子年九月廿九日魯斯亜船渡来国王ヨリ我邦エ呈スルノ書」、「別勒窓律安設戦記」、「或問海防漫記」、「琉球談抄書」、「無人島漂着者始末書」、「依崔天淙見殺之事従三使贈対州公之書」、「三使口上」、「傾蓋唱和録」、「鐵函心史抄書」など11種の書が合綴されているが、それぞれの書誌事項は下記のとおりである。

丁数	叢書名等	筆写年等	筆写者
1a～16b （12b白紙）	加模西葛杜加国風説考序 （１a～１b　加模西葛杜加国風説考序 ２a～12a　赤狄風説之事 13a～16b　附録　蝦夷地ニ東西之差別有事）	歳次甲寅嘉永七 仲春　旬八日	望嶽
17a～19b	文化元子年九月廿九日魯斯亜船渡来国王ヨリ我邦エ呈スルノ書	嘉永七寅二月 廿七日写之記 高井氏所蔵	無
20a～32a （32b白紙）	別勒窓律安設戦記	無	無
33a～45b	或問海防漫記	于時嘉永七甲寅 三月　旬一写於 獨醒館南窓下	望嶽
46a～56b	琉球談抄書	無	無
57a～66b	無人島漂着者始末書	無	無
67a～68b	依崔天淙見殺之事従三使贈対州公之書	無	無
69a～69b	三使口上	無	無
70a～79a （79b白）	傾蓋唱和録	無	無
80a～81b	鐵函心史抄書	無	無
82a～89b	朝鮮筆記	歳在甲寅嘉永七 三月　念一写焉	源崇広

「加模西葛杜加国風説考」およびそれに合綴された各書の詳細については、許秀美（2012）「国立国会図書館所蔵「朝鮮筆記」について―合綴された諸資料に関する考察―」『大谷学報』第91巻第2号に詳しい。

「朝鮮筆記」は、松本斗機蔵が書き残した最上徳内の「蔵書目録」にその名を確認できるものの、国会図書館本「加模西葛杜加国風説考」に合綴された本写本が現伝の唯一本である。国会図書館本「加模西葛杜加国風説考」およびそれに合綴された各書全89丁のうち、「朝鮮筆記」は末尾部分の8丁分（82a～89b）を占める。内容のほとんどは、慶尚道の草梁倭館に関すること、対馬と朝鮮との交易に関することである。しかし、その順序・体裁については、朝鮮より日本へ送る品々の記述のあと、「白頭山ト云山咸鏡道之内ニ有」と、朝鮮の地理についての記述があらわれるも、すぐその後には、また倭館に関する記述に戻るなど、相当混乱した様相を呈している。なんらかの底本を筆写者が随意に抜粋し、部分的に筆写したためではないかと推される。その底本については、松本斗機蔵が書き残した最上徳内の「蔵書目録」にある「朝鮮筆記」であるのか、最上徳内の「蔵書目録」記載本以外の別本であるのか、目下不明とせざるを得ない。

「朝鮮筆記」のかな書き朝鮮語語彙は、「朝鮮筆記」の末尾の「朝鮮語右訳下訓」の条に収められている。延べ270個の語彙が収録されているが、「油」と「墨」が重複しているので、異なり語彙数は268個である。一丁に縦9個、横9～10個の標題語を書き、標題漢字の右あるいは下にカタカナで朝鮮語語彙の発音を表記している。「右訳下訓」としているものの、必ずしもその通りではない。これらかな書き朝鮮語は、同時期に書かれた「全一道人」、「朝鮮語訳」と比較検討をおこなった。「朝鮮筆記に」収録されているかな書き朝鮮語の特徴としては、上向二重母音の単母音化（ㅢ>e）、前舌単母音化していない下向二重母音、また、第2音節「i」の影響により第1音節の後ろに/y/が挿入された例をあげることができる。その他、「・」の非音韻化や語頭複子音の喪失の過渡期的様相を示している。これらは、おおむね「全一道人」や「朝鮮語訳」など対馬において成立した他の朝鮮語学書類と同様の傾向を示すものと位置づけられる。しかし、本資料には、いまだ解読できていない語彙も多数あり、今後、これら未解読語彙についてのさらなる探求が必要である。

本地物語の研究―菩薩行と誓願を視座として―

（2011-2012年度）特別研究員　箕浦 尚美

室町時代を中心とした短編の物語群であるお伽草子のうち、「本地物」と呼ばれる作品群は、一般に、「㈠主人公は多く神仏の申し子であるというような異常な出自をもち、㈡いったんは流離・艱難のもとに沈淪するが、㈢神仏の加護によって救済されやがて神仏になる」（荒木繁『語り物と近世の劇文学』桜楓社、1993年、初出1959年）と定義される。この性格を強く持つ本地物には、仏や菩薩を対象とする作品と『神道集』所収話のように神を対象とするものとがあるが、本地物語の原型は、お御伽草子の時代を遡って存在する。本研究では、お伽草子以前の本地物語に焦点を当て、菩薩行と誓願の観点から、その成立と展開を再検討することを主たる目的とする。お伽草子の本地物語において、主人公が仏菩薩になる根拠の多くは、上記の引用にもあるように、「神仏の申し子」たることであり、菩薩行や誓願は強くは見られない。その差異も着目すべき事柄と考えている。

この問題を考察するために、特に重要な物語は、以下の2話と考え、研究を進めた。

①善生太子の物語：原話は、平安期に日本で編纂されたと考えられる『大乗毘沙門功徳経』であり、『今昔物語集』巻五第二十二にも見える。喜見菩薩・大吉祥菩薩・多聞天・持国天の前世物語である。お伽草子『阿弥陀の本地』は同内容であるが、阿弥陀・薬師・観音・勢至の前世物語として描かれている。

②早離・速離の物語：原話は、平安期に日本で編纂されたと考えられる『観世音菩薩往生浄土経』であり、同話は、簡略ながら『宝物集』にも見られる。金剛寺蔵〈佚名孝養説話集〉や真源『往生要集裏書』（真福寺蔵）には、『往生仏土経』の説として掲載されている。阿弥陀・観音・勢至の前世物語である。近世

初期には経典を絵巻化した伝本（岩瀬文庫蔵）があり、影響を受けたお伽草子に『日月の本地』がある。

これらの物語には、苦難・捨身・誓願を経て、転生するという共通点が指摘できる。『法華経』『金光明経』などの大乗仏典において菩薩が身を犠牲にして誓願を立てる過去の因縁物語（pūrvayoga）の影響下にあると考えられ、単純な転生の繰り返しとも言える初期仏教の本生経（jātaka）とは異なっている。また、主人公達の受ける苦難が、幼い時期の親の死や継母による冷遇などの外部からの事情で生じた苦難であって、自ら行う菩薩行による苦難ではないという特徴もあり、これは、仏典本来のものとは異なる点として指摘できる。この特徴は、以前に筆者が紹介した金剛寺蔵〈佚名孝養説話集〉（「金剛寺蔵〈佚名孝養説話集〉翻刻」（『伝承文学研究』58、2009年））という新出資料の説話群にも共通する。同書には、②の早離・速離の物語を含め、同様の性格を持つ説話が多く含まれ、幼くして親を亡くした子どもの物語が仏や菩薩の前世物語として描かれている。釈迦とその家族（浄飯王・摩耶夫人など）の前世として描かれる話がある一方、普賢・文殊・吉祥天・弥勒・多聞天などの前生物語も含まれているが、初期の本地物語の例と捉えられる。

主な研究活動は以下のとおりである。

- 平安期における菩薩行・誓願についての把握・分析。平安期の菩薩行・誓願が反映されている金剛寺蔵『百願修持観』（平安後期写）の分析を行った（「《百願修持観》之誓願観」（池麗梅訳）（鄭阿財等『仏教文献与文学』、仏光文化事業有限公司（台湾）、2011年10月））。
- 関連資料『観世音菩薩往生浄土経』、『大乗毘沙門功徳経』、金剛寺蔵〈佚名諸菩薩感応抄〉（平安後期写）の精読。
- 中世本地物語の分析。申し子の具体例を調査・整理し、「本地物語における申し子譚の位相」と題して、口頭発表を行った（国際日本文化研究センター共同研究「夢と表象―メディア・歴史・文化」（代表・荒木浩）平成23年度第５回共同研究会2012年１月）。

今後の研究課題は、諸説話集における仏菩薩の前生譚との比較分析、お伽草子の菩薩行・誓願の観点からの分類分析を進めることであり、それによって、菩薩行と誓願を含む本地物語の展開をより具体的に提示したいと考えている。

なお、本研究は、文部科学省科学研究助成事業（学術研究助成基金助成金）（若手研究(B)：2011-2013年度）の研究の一部として行ったものである。

プラトン『メノン』の総合的研究

（2012年度）特別研究員　大草 輝政

本研究の目的は、プラトン『メノン』の哲学的・思想的な意義を明らかにし、あわせて『メノン』の解説・注解付き翻訳も公刊することである。本研究は日本学術振興会2012年度科学研究費補助金（若手研究Ｂ）交付によるものであり、具体的な目的として以下の諸点が設定されている。(1)『メノン』が西洋思想史において、具体的にどのように受容・批判されたかを探る。(2)真理探究の方法やイデア論を中心に、従来の『メノン』研究とは異なる角度から光を当てる。(3)その他『メノン』について、徳の教育や、知と思わくの区別の問題など、各トピックについて多角的に研究し、それらの連関を見出すとともに、解説・注解付きの翻訳を公刊する。

2012年度におこなった具体的な活動としては、次のように整理される。(i)『メノン』の古典期における影響、さらに中世哲学、近世哲学、現代哲学への影響などに関する主要文献の収集、(ii)『メノン』の解説・注解付き翻訳作業の着手、(iii)プラトン『メノン』における想起説の射程の再考。

(i)にかんしては、プラトン以前の思想的伝統、プラトンの著作のほか、アリストテレス、プラトニズム、ストア派、エピクロス派、アウグスティヌス、ボエティウス、ガリレオ・ガリレイ、ロック、ライプニッツ、カント、ケンブリッジ・プラトニストたちの諸著作、さらにはD. デイヴィッドソン、R. ノージック、E. ソウザらによって分析哲学的に取り上げられた「想起説」など、目配せすべき資料は膨大にあるが、2012年度は大谷大学所蔵図書やJSTORなどのe-journalを活用して主要文献の収集をおこなった。また、プラトン研究史の調査として、

とくに、1950年から1960年代に（分析哲学運動の影響下）おこったと言われる、古代哲学研究の「大変化」についていくつかの論点を整理し、ある分担執筆原稿を完成させた。(ii)にかんしては、主として大谷大学真宗総合研究所のミーティングルームにおいて、不定期ながらだいたい週1～2回ほどのペースで、同研究所特別研究員のもう一人の古代ギリシア哲学研究者と会合を重ね、『エウテュプロン』『メノン』の新訳作成に向け検討をおこなった。訳出作業は、R. S. Bluck ed. の*Plato's* MenoやE. S. Thompson ed. の*Plato:* Menoなど古典的な注釈書をはじめ、日本や欧米で出版された新訳も随時参照しながら進められた。(iii)にかんしては、2013年2月13日開催の大谷哲学会冬季研究会において、「プラトンの想起説について」と題する口頭発表をおこない、また雑誌論文として「誰が何を想起するのか――『メノン』『パイドン』を中心に」（『哲學論集』第59号, pp. 39-54）を提出した。大谷哲学会冬季研究会のほうでは、哲学科、社会学科、教育・心理学科など多分野による学科横断的会合において、最近の研究動向も踏まえながら、想起説のいくつかのポイントをおおまかに指摘する発表をおこない、『哲學論集』に投稿した雑誌論文のほうでは、より具体的に関連テクストを提示しつつ、主に、プラトンの想起説における想起の主体と対象について再考をおこなった。これらにおいて解明を目指した論点は、次のようにまとめられる。まずD. Scottによれば、プラトンの想起説は二種――KとD――に大別される。このうちK解釈は、カント的と（Scottによって整理）される解釈であり、ちょうどカントにおける直観と概念の役割に対応して、プラトンにおいても、感覚とイデアの二源泉が想起には必要だとするものである。この場合、想起の主体はひろくわれわれ人間一般とすることができるが、想起の対象については、あくまでイデアなどに限定されることになる。それに対してD解釈は、デマラトスの逸話に訴えることにより、想起の主体と対象を、それぞれ、哲学者とイデアに限定するものである（デマラトスはペルシアで活動するギリシア方のスパイで、あるとき二重になった書板をもちい、書板表面の蠟の部分にはペルシア人に向けたメッセージを書き、他方、蠟の下の木の部分にはギリシア人に向けた本当のメッセージを刻んだ。この逸話は、表面のメッセージは信用できない感覚世界の内容を、しかしその底にあるメッセージは魂の内奥にあるイデアの生得知の内容を表す、といった筋で想起説を解釈する際に援用しうる）。この場合、ほとんどの人間は、想起を開始すらしていないという筋書きが導出される。これら二種類の解釈に対して、拙論では、第三の解釈として、想起の主体と対象をそれぞれ目一杯ひろくとる解釈を追究した。すなわち、想起の主体はすべての人間、想起の対象はあらゆるもの、というものである。また、その第三の解釈を追究する過程で、プラトンが二世界説的な想定よりも、むしろ一世界説的な立場から想起説を提示しているとの可能性を示唆した。

真宗総合研究所彙報　2012. 10. 1～2013. 5. 31

■研究所関係

◎研究所委員会

◇2012年12月25日㈫　10時00分～（博綜館５階第４会議室）

1．研究所紀要の投稿規定について
2．2013（平成25）年「一般研究」の採択について
3．モンゴル国立大学との学術交流協定について
4．造営史関連出版について
5．その他

◇2013年３月18日㈪　13時～（博綜館５階第４会議室）

1．2012（平成24）年度「特定・指定研究」の研究成果について
2．2013（平成25）年度「特定・指定研究」の研究計画について
3．一般研究の採択基準（案）について
4．その他

◇2013年５月17日㈮　13時～（博綜館５階第４会議室）

1．2013（平成25）年度「特定研究」の研究員追加について
2．2013（平成25）年度「一般研究」研究組織について
3．客員研究員の委嘱について
4．特別研究員人事について
5．その他

○学術交流連絡会

◇2012年10月25日㈭　12時15分～（博綜館５階第３会議室）

1．ネパール国ポン教僧院長の本所招聘と「公開講演会」について
2．モンゴル国立大学との学術交流について
3．その他

◇2013年５月９日㈭　12時15分～（博綜館５階第３会議室）

1．ベトナム社会科学院宗教研究院の来日について
2．その他

○「特定・指定研究」研究成果報告会

◇2013年３月８日㈮　13時～（響流館３階 マルチメディア演習室）

1．2012（平成24）年度「特定・指定研究」の研究成果について
2．その他

「建学の精神」教育推進研究

《全体研究会》

2012年度

第５回研究会

◇2012年10月３日㈬　15：00～17：00

場所：響流館４階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
内容：第５回「建学の精神」推進教育研究　研究会
議題：明治期の宗教教育における国家と学問と建学の精神
講師：高橋陽一氏（武蔵野美術大学教授）

第６回研究会

◇2012年11月22日㈭　16：30～18：00

場所：響流館４階　会議室
内容：第６回「建学の精神」教育推進研究　研究会
議題：佐々木月樵『樹立の精神』を背景から読む(1)
講師：織田顕祐氏（大谷大学教授）

第７回研究会

◇2012年12月20日㈭　16：20～18：30

場所：響流館４階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
内容：第７回「建学の精神」教育推進研　究研究会
議題：佐々木月樵『樹立の精神』を背景から読む(2)
講師：織田顕祐氏（大谷大学教授）

2013年度

第１回研究会

◇2013年４月11日㈭　13：00～14：30

場所：響流館４階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
内容：第１回「建学の精神」教育推進研究　研究会
議題：本年度の活動計画について

第２回研究会

◇2013年５月２日㈭　13：00～14：30

場所：響流館４階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
内容：第２回「建学の精神」教育推進研究　研究会
清沢満之「開校の辞」脚注の検討作業

第３回研究会
◇2013年５月９日(木)　13：00～14：30
場所：響流館４階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
内容：第３回「建学の精神」教育推進研究　研究会
清沢満之「開校の辞」英訳確認と日本語訳検討作業

《事務連絡会》
第１回研究会
◇2013年４月８日(月)　13：00～14：00
場所：博綜館５階　512研究室
内容：第１回研究会にむけての準備など

国際仏教研究
〈英米班〉
《会議・研究会》
◇佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」翻訳研究
第16回研究会　2012年10月８日(月)　18：00～20：00
第17回研究会　2012年11月20日(火)　14：30～16：00
（最終回）
（於：真宗総合研究所内ミーティングルーム）
◇ハンガリー、エトヴェシ・ロラーンド大学（ELTE）における仏教シンポジウム関係
第１回準備会議　2012年12月14日(金)　12：10～13：00
（於：ミーティングルーム）
◇カナダ、ブリティッシュ・コロンビア大学における国際真宗学会パネル発表関係
パネル準備会議　2013年１月23日(水)　12：10～13：00
（於：井上研究室）
第１回研究会　2013年５月８日(水)　18：00～20：00
（於：ミーティングルーム）
第２回研究会　2013年５月16日(木)　16：20～17：50
（於：ミーティングルーム）
◇国際研全体ミーティング
2013年度第１回打ち合わせ
2013年 ４月10日(水)　10：00～10：40
（於：真宗総合研究所内ミーティングルーム）
《公開講演会》
◇2012年10月11日(木)　16：20～17：50
講師：辛嶋静志氏（創価大学国際仏教学高等研究所教授・所長）
講題：「言葉の向こうに開ける仏教の原風景―経文に見える「浄土」の意味―」
会場：響流館３階　マルチメディア演習室
◇2012年11月23日(金)　16：20～17：50
講師：Lambert Schmithausen
ランベルト・シュミットハウゼン氏
（ハンブルク大学名誉教授）
講題：Some Remarks on the Origin of Ālayavijñāna
「アーラヤ識の起源に関するいくつかの見解」
会場：響流館３階　メディアホール

西蔵文献研究
《公開講演会》
◇11月26日(月)　16時30分～（響流館３Ｆマルチメディア演習室）
テンパ・ユンドゥン師（ティテン・ノルブツェ僧院僧院長）
「ポン教の現状と修行法について」
※翌11月27日(火)16時30分～研究所内にて講師を囲んでポン教の現状や教義について研究会をおこなった。

《研究会》
◇３月16日(土)　13時～（研究所内）
『サンプ寺統史』の研究
西沢史仁氏（嘱託研究員）作成の校訂テキストおよび試訳の検討

◇３月８日(土)　15時～（研究所内）
◇３月９日(土)　10時～（研究所内）
寺本婉雅日記に関し、高本康子氏（嘱託研究員）作成の翻刻の確認および今後の作業計画について検討

《研究打ち合わせ》
◇10月３日(水)　16時30分～（真宗総合研究所ミーティングルーム）
議題：研究業務の進捗状況の確認

◇10月31日(水)　16時30分～（真宗総合研究所ミーティングルーム）
議題：研究業務の進捗状況の確認

◇12月19日(水)　16時30分～（真宗総合研究所ミーティングルーム）
議題：研究業務の進捗状況の確認

◇１月９日(水)　16時30分～（真宗総合研究所ミーティングルーム）
議題：北京版チベット大蔵経の撮影について

◇1月22日(火) 18時～（真宗総合研究所ミーティングルーム）
議題：研究業務の進捗状況の確認と来年度研究業務について

◇2月26日(水) （真宗総合研究所ミーティングルーム）
議題：研究業務の進捗状況の確認と来年度研究業務について

《出張》
◇3月7日(木)～3月14日(木)
清水洋平（嘱託研究員）
出張先：大英図書館（British Library）
目的：同館所蔵のパーリ語写本コレクションのうち大谷貝葉と関連するパーリ語写本についての調査

大谷大学史資料室
＜研究会参加＞
全国大学史資料協議会西日本部会2012年度第4回研究会
日　程：2012年12月4日
場　所：京都大学百周年時計台記念館
参加者：吉田仁美

＜ミーティング＞
2013年5月8日　14：40～16：10
出席者：藤田義孝・戸次顕彰・松岡智美
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：新体制による2013年4月段階での問題点の確認・話し合いと2013年度の活動計画について

2013年5月14日　13：00～14：00
出席者：藤田義孝・戸次顕彰・松岡智美
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：大谷大学図書館における大学史スポット展示の企画

＜大谷大学史資料室スポット展示の作業＞
2012年11月6日　10：00～12：00
タイトル：「大谷大学の歴史をたどる～図書館トリビア～」
参加者：戸次顕彰・吉田仁美
場　所：大谷大学図書館入口展示スペース
展示期間：2012年11月6日～2013年5月末日まで（予定）

上記活動以外にも、大谷大学史資料室では大学史資料の調査・整理や、閲覧・質問等への対応を日常業務として行った。
また展示に際しては、大谷大学博物館からの協力を得た。ここに謝意を記す。

■人事（2013年4月1日付）
研究所主事　（新）藤田義孝（旧）釆睪　晃
□特別研究員（2011年8月24日付）
＊許 秀美
現　　職※ 任期制助教
研究期間：2011年8月24日～2013年3月31日
研究課題：国会図書館所蔵「朝鮮筆記」の研究―かな書き朝鮮語に着目して―
□特別研究員（2012年4月1日付）
＊大草輝政
現　　職※ 任期制助教
研究期間：2012年4月1日～2015年3月31日
研究課題：プラトン『メノン』の総合的研究
備　　考　2013年3月31日研究終了
＊清水洋平
現　　職　本学、名古屋大学非常勤講師
研究期間：2012年4月1日～2015年3月31日
研究課題：タイ国を中心とする東南アジア撰述仏教説話写本の研究
＊竹花洋佑
現　　職　本学非常勤講師
研究期間：2012年4月1日～2015年3月31日
研究課題：後期田辺哲学における象徴概念の研究
＊河﨑　豊
現　　職　任期制助教
研究期間：2012年4月1日～2015年3月31日
研究課題：バガヴァティー・アーラーダナーの新校訂本作成と全訳によるジャイナ教の断食死研究
□特別研究員（2012年8月31日付）
＊黒澤祐介
現　　職　任期制助教
研究期間：2012年8月31日～2014年3月31日
研究課題：保育者の悩み・学習ニーズの変容と同僚性を基礎とした研修に関する実証的研究
＊宋 基燦
現　　職　任期制助教
研究期間：2012年8月31日～2014年3月31日
研究課題：「民族学校」の日韓比較研究―日本の「朝鮮学校」と韓国の「華僑学校」を中心に―
□特別研究員（2013年4月1日付）
＊小谷信千代

現　　職　本学名誉教授
研究期間：2013年４月１日～2017年３月31日
研究課題：スティラマティの倶舎論注釈書『真実義』
梵文写本第一章の研究

＊白館戒雲
現　　職　本学名誉教授
研究期間：2013年４月１日～2016年３月31日
研究課題：インド・チベットにおける般若学の研究

＊西尾浩二
現　　職　本学非常勤講師
研究期間：2013年４月１日～2014年３月31日（延長）
研究課題：プラトンの中期イデア論の生成

＊松下俊英
現　　職　本学非常勤講師
研究期間：2013年４月１日～2016年３月31日
研究課題：『中辺分別論』の未解読チベット語註釈写
本の研究

※現職は、就任時の職名を記載した。

研　究　所　報　第 62 号

2013年 6 月 1 日　発行
編集発行　大谷大学真宗総合研究所
〒603-8143　京都市北区小山上総町
Tel. 075-411-8498　Fax. 075-411-8435

©2013 Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute